

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

学習プログラムの開発と実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森茂, 岳雄, 中山, 京子, 吉荒, 佳枝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002066

第2章 学習プログラムの開発と実践

森 茂 岳 雄

中央大学文学部

中山 京 子

東京学芸大学教育学部附属世田谷小学校

吉 荒 佳 枝

国立民族学博物館研究支援推進員（当時）

はじめに

1. 「弁当展」における学習プログラムの開発

- 1) プログラムの開発の経緯
 - a. 全米日系人博物館による学習プログラムの開発
 - b. 沖縄県立博物館でのパイロット・スタディ
- 2) 子どもの学びを支援する学習材の開発
- 3) 学校関係団体へのアプローチ
 - a. 説明会開催まで
 - b. 第1回説明会
 - c. 第2回説明会
 - d. 学校主体という基本姿勢
 - e. 今後の課題
- 4) 博学連携学習プログラムの実施状況

2. 総合的学習における学習プログラムの取り組み

—大阪府茨木市立三島中学校を事例に

- 1) 茨木市立三島中学校との博学連携
- 2) 事前授業
- 3) 博物館見学
 - a. 博物館で学ぶこと
 - b. 見学の流れ
 - c. 内容や構成のねらい
 - d. 子どもたちの様子
 - e. 反省点
- 4) 事後学習
 - a. クラス発表
 - b. 文化祭発表
 - c. 学校側の取り組みの姿勢

3. 課外活動における学習プログラムの取り組み
—和歌山県国際教育セミナーを事例に—
 - 1) セミナー概要
 - 2) セミナーの実際
 - a. 展示見学 研修(A)
 - b. 授業 研修(B)
 - 3) 参加者の学び
 - a. 引率者の感想
 - b. 生徒の感想
4. 学習プログラムの実践から得られたもの
 - 1) 「もの」に触れる
 - a. 学校教育における言語教授の限界
 - b. 「弁当展」での「もの」との触れ合い
 - 2) そこで人に出会うこと
 - a. 北山田小学校の目的
 - b. 事後学習の支援
 - c. 子どもたちの発表
 - 3) テーマと事後学習
 - a. 小学校と中高等学校
 - b. オープンエンドの学びの支援
 - 4) 博学連携と今後の課題について

資料<1> 和歌山/三尾村移民の歴史

資料<2> 田村光之助の一生

資料<3> 「ある日系人漁者の生涯」より抜粋

資料<4> ヘンリー杉本『スマレのせんそう』より抜粋

資料<5> 教師向けアンケート 弁当展の「学習プログラム」全体について

資料<6> 教師向けアンケート 弁当展のテーマと学習プログラムについて

付論 日米の博物館との連携をいかしたハワイ日系移民に関する単元開発と実践
—グローバル教育と多文化教育の結合可能性—

はじめに

教師があらかじめ設定された同一の教育内容を一齐に子どもに教授するという図式の中では、子どもの学びは比較的画一的であるが、教師が個々の子どもの願いや思いを尊重し、一人ひとりの学びを大切にすることで、この図式が変化する。子ども一人ひとりの学びは方法においてもスタイルにおいても実に多様である。教師は子どもの興味や関心を大切にし、子どもの求めに応じて学びの機会や場を用意することが求められる。2002年度から実施される「総合的な学習の時間」においては、地域の実態や学校の特

色に応じて展開するものとされている。そこでは子どもの学びの機会や場を、教室という制限された空間とその中の人間関係で完結するだけでなく、さらに広範な空間と人間関係に広げることが求められている。たとえば、学校の外にそれらを求めた教育活動例として、地域の住民や専門家を教室に招いて授業に参加してもらった実践や、地域へのフィールドワークを通して多様な人々の指導・協力を仰ぐ実践、また最近では、父母のボランティアが教師のアシスタントとして教室に積極的に入るといった実践などが広がってきている。これらの実践は子どもの学びに応じて教師が積極的に地域の住民や専門家と連帯・協力し、学びの機会や場を開いている事例と言えよう。

佐藤学は、学校及び教師・専門家との「連帯」について、「学びの共同体へと学校を再組織する改革においては、さらに、学校外の専門家や保護者や地域の人々や教育行政との幅広い連帯のネットワークが構成される必要がある。21世紀の学校教育は、学校の専門家集団と地域の共同体と行政関係者と教師以外の専門家集団との幅広い連帯を基盤として、その公共的領域を再構成し維持し発展させなければならないだろう。この幅広い連帯のネットワークにおいて、その中核となるのは、専門家集団として自立性を樹立した学校の教師集団である。」(佐藤 1966:p.170)としている。

従来から教科学習においても、学びの機会と場を開いていくことは当然重要と考えられてきた。しかし「総合的な学習の時間」においては、その趣旨からも学びの機会や場を学校の外に求めることがさらに多くなることが予想される。総合学習の中で、子どもの願いや求めを尊重し、その多様な学びを保障しようとするとき、ますます教師の個人的連帯関係をこえた外との関係や教室以外の空間に学びの場が求められよう。そこで考えられる一つの事例が、博物館等地域の施設と学校との連携・協力である。本章では、国立民族学博物館が全米日系人博物館の巡回展を活用し学校教育の連携・協力の試行研究として取り組んだ学習プログラムの開発と実践について検討する。

これまでも、主に社会科において各地域の博物館や郷土資料館を「社会科見学」や「校外学習」の場として利用した学習が実践され、報告されてきた。継続的に一単元にわたって博物館を利用した実践もあるが⁽¹⁾、単元内に博物館の利用が継続的に位置付けている実践は少ない。現在でも1日限りの社会科見学として設定したり、学習の動機づけや既習内容を実物を通して実感したり確認したりする意味合いでの博物館利用がほとんどである。しかもそこで見られる子どもの姿は、目的もなく展示物を何となく眺めて一巡して博物館の空気を吸ったというようなものか、あるいは展示物の解説パネルの言葉をノートにただ細かく写し書きをしている姿である。これでは、子どもの側に博物館見学の意味が明確に認識されておらず、情報をたくさん仕入れて文字化することを評価されてきた結果なのである。

1977年に一般公開された国立民族学博物館は以上のような反省に立って、展示の説明書きを極力減らした。当時の館長梅棹忠夫は現場教師との対談の中で「くわしい博物館をかいておきますと、子どもはその説明文をノートに写すだけになる。それをやられたら博物館の値打ちがない。とにかく、ものをみなさい。そこから疑問が出てくるわけでしょう。その疑問にまたいろいろこたえる方法が出てくる。それで、文字による説明をひじょうに減らしたんです。」(梅棹 1983:p.144)と述べている。また、対談相手の山内篤(当時大阪教育大学教育学部附属池田中学校教諭)は、対談の中で民族学博物館

の見学を「教室では得られない総合的学習であった」（山内 1983:p.142）と振り返っている。大阪教育大学教育学部附属池田中学校では、生徒の欧米志向と発展途上国や諸民族に対する厳しい偏見の目を是正するために、社会科の教員を中心に国立民族学博物館の見学を 1979 年から実施した。小グループごとに興味・関心のある地域を選び、その地域の中から見学のテーマを設定し、あらかじめ下調べをしてある程度の情報を収集して、民族に関する率直な感想を話し合わせた後、見学を実施した。見学では、展示物の中で心を打ったもののスケッチをしたり、テーマを深める展示や設置されたその他のメディアを視聴しメモをとったりした（山内 1984:pp.43-49）。本実践は社会科学学習の発展として実施された見学であったが、社会科の枠を越えて生徒が自らの興味・関心に基づいて、博物館見学を通して「本物」に触れて追求し表現するという意味で「教室では得られない総合的学習であった」のである。梅棹は、博物館を活用した学びについて、見学ノートに感想文を書くためには国語の能力というものが必要であり、スケッチをとるには図画の能力も必要であり、社会的マナーの教育の場でもあることを指摘し、その意味で総合的な学習の場として博物館をとらえている。

今日、多くの博物館では夏休みなどの期間や週末に、「親子教室」や「体験教室」などの子どもを対象とした特別プログラムを企画し、子どもたちが普段学校では体験できないさまざまな学習を経験させたり自由研究に取り組んだりすることができるようになってきている。また、学校の学習の中で興味や関心を抱いたことを博物館でさらに追究し深めていこうとする子どもに対して、博物館は学びの場を提供している。しかし、博物館が学校へ直接働きかけ学校とともにカリキュラムを開発したり、教員の研修を行うといった連携・協力というものは一般的に少ないのが実状である。国立民族学博物館についても同様である。しかし、「総合的な学習の時間」の新設に伴い、子どもの学びの場が広がることを考えると、博物館から学校への積極的なアプローチが期待される。早い時期から博物館が学校教育との連携・協力を模索した先駆的研究例として栃木小山市博物館、福島県立博物館、北海道開拓記念館の実践があげられる（小山市立博物館 1990:p.13, 小野 1993:pp.33-62, 藤田 1994:p.99）。また、博物館と学校が密に連携・協力し、カリキュラム開発を通して子どもの学びの場を広げていった事例として、埼玉県戸田市郷土博物館の博学連携の歩みをあげることができる（古澤 1998:p.151）。

国立民族学博物館を例にとると、現在、多くの学校団体が遠足や社会科見学の一環として同館を訪れている。栗田靖之（国立民族学博物館）は博物館に期待されていることとして、「子どもたちに展示の趣旨を解説するには、ミュージアム・ティーチャーの配置が考えられる。また子どもたちは博物館に連れてくる教師のために Teach the Teachers Program も必要であろう。それとともに、ある文化の代表的な民具を教育キットとして揃え、それを各学校に貸し出す制度も有効であろう」と提案している（栗田 1995:p.151）。このような視点から、国立民族学博物館では現在、貸し出し用学習キット「みんなぱく」の開発が進められ、すでに試行実践がはじまっている。また、2001 年春には同館に学習支援室が設置され、博学連携の推進が目指されている。たとえば、これまで校外学習として引率してくる教師によって見学のためのパンフレットやワークシートが作成されていたが、現在は博物館によって積極的にワークシートの開発も行われている。近年では国立民族学博物館の月刊誌『月刊みんなぱく』においても、博物館研

究者と学習支援室が共同して博学連携を意識した特集(2)を組んでいる。

以下に詳細に述べる本学習プログラムの実施は、この学習支援室ができて初めて本格的に取り組む展示を活用した博学連携の実践であり、全米日系人博物館、国立民族学博物館学習支援室、外部研究協力者の国際的連携のもとで進められたものである。

(森茂岳雄・中山京子)

1. 「弁当展」における学習プログラムの開発

1) プログラムの開発の経緯

a. 全米日系人博物館による学習プログラムの開発

ロサンゼルスの中米日系人博物館 (Japanese American National Museum) では、1992年の開館以来、日系人に関する資料の収集、保存、展示、研究だけでなく、アメリカにおける日系人の歴史的経験や文化遺産を子どもを含むより多くの人々と共有するためのさまざまな教育活動を展開している。その活動のひとつに、National School Project (NSP) がある。NSP は、学校、教師や教育委員会との連携・協力を通して日系人について学ぶカリキュラムの開発や、それを教える教師のための研修プログラムの開発や実施をおこなっている。その成果のひとつとして、同博物館のハワイの委員会が1997年に企画した巡回展示「弁当からミックスプレートへ—多文化社会ハワイの日系アメリカ人—」(From Bentô to Mixed Plate: Americans of Japanese Ancestry in Multicultural Hawai'i) 併せた教師用指導資料集 (*Educational Materials*) の開発があげられる。これは、ハワイの教師集団との連携・協力によって作成されたもので、全米の巡回先における学習活動を支援する資料として用いられている。また、1999年には、本プロジェクトによって、ハワイだけでなく本土を含めた日系人の歴史的経験や文化遺産を学ぶための授業例や教材を集めた「日系アメリカ人カリキュラム・フレームワーク」(*Japanese American Curriculum Framework*) が作成され、博物館見学の事前・事後学習や直接博物館に来ることのできない学校における日系人学習の実践の支援に供している。

もうひとつの取り組みは、他の機関が開発している日系人学習プログラムへの同博物館の協力である。その例として、スタンフォード大学国際異文化間教育プログラム (SPICE) と協力した南北アメリカにおける日系移民についての学習プログラム (*Japanese Migration and the Americas: An Introduction to the Study of Migration*, 1999) の開発がある。これは、同博物館のもうひとつのプロジェクトである International Nikkei Research Project (INRP) の研究成果を活用して初等・中等学校における日系移民学習のプログラム開発をめざしたものである。

このような博物館が教師や他の教育機関と連携・協力して開発したカリキュラムや教材は、日系人についての専門的知識を持たない現場教師にとって、日系人についての学習を実践する際に子どもの学びを保障し、深化させる有効な支援となっている。

先に記述した巡回展示「弁当からミックスプレートへ—多文化社会ハワイの日系アメ

リカ人」に併せて1997年に示された教師用指導資料、*Learning Opportunities “From Bentô to Mixed Plate: Americans of Japanese Ancestry in Multicultural Hawai’i”*、はバインダーに整理され、具体的な授業案として示されている。このバインダーで示されている教材は、1994年に発表された全米社会科協議会(NCSS)の『社会科教育のためのカリキュラムスタンダード(Expectations of Excellence)』の一部に示されているカリキュラム基準とテーマに添う形になっている。

このように巡回展示にそって授業案が示されているということ、展示を開発した立場と現職の教師と博物館が協同で開発したものであることから、博学連携のひとつのモデルを示していると言えるだろう。このカリキュラムには以下の7つの単元(活動)の指導案が示されている。

- (1)「ハワイの日系人家族」学年：幼稚園～2学年 教科領域：すべて
- (2)「多文化ハワイとアメリカ本土の日系人」学年：3～5学年 教科領域：すべて
- (3)「ピラ・フランカの風景—ハワイ・ヒロ 1930～1960年代」学年：6～8学年 教科領域：社会科、国語
- (4)「言語と文化」活動：博物館で丹念に探す 学年：7～12学年 教科領域：社会科、世界言語、ESL
- (5)「あなたは英語を話しますか？」学年：7～12学年 教科領域：社会科、国語、世界言語、ESL
- (6)「活動：今日の言語問題」学年：7～12学年 教科領域：社会科、国語、世界言語、ESL
- (7)「多文化主義」学年：9～12学年 教科領域：社会科

(2)～(4)は単元内に巡回展示「弁当からミックスプレートへ」の見学が設定されている。どの単元も学校の実態に合わせながら数日から1ヵ月近くをかけて展開するように示されている。1日の見学計画ではなく、時間をかけて取り組む姿勢で幼稚園から高校までを対象にして、発達段階を考慮し、教科領域を横断するカリキュラムとして構想されていることから博学連携への意欲的な取り組みが見て取れる。

しかし、アメリカの学校や児童生徒を対象にして構想されたカリキュラムや単元計画をそのまま日本の学校の文脈の中で使用することはできない。日本の学習環境に合わせて展示を活用した単元開発が必要である。そこで、全米日系人博物館と関わりを持って研究を進めてきたわれわれが日本での展示に合わせて単元開発をおこなうことになった。

日本の教育現場で実践化をするために、指導計画、指導案といった枠で表現すること、ただ日系人について学習するのではなく、学習のアウトプットとして身近な地域の多文化共生に視点を向けるようにしたこと、展示会場を訪問して直接展示と関わって学びを深めることを単元開発の視点とした。

b. 沖縄県立博物館でのパイロット・スタディ

2000年は沖縄からのハワイ移民100周年にあたり、巡回展示「弁当からミックスプ

レートへー多文化社会ハワイの日系アメリカ人」が11月10日から12月9日まで国立民族学博物館での開催に先行して沖縄県立博物館で開催された。そこで、全米日系人博物館、沖縄県立博物館と連携・協力し、その展示を活用して沖縄の子どもたちが、日系アメリカ移民の歴史的経験やハワイにおける多文化共生の現状についての理解を深め、今後多文化化の進展が予想される日本における民族共生について共感的に考える総合学習の教材開発と授業づくりをおこなった。その際、教材開発の視点として、これまで個別におこなわれてきたグローバル教育と多文化教育の結合をめざした。そして展示が開催された期間に那覇市の小学校や児童館の児童生徒を対象に授業実践をおこない、次の国立民族学博物館での開催にむけてその成果と課題を明らかにした。(詳細については後掲「付論」を参照。)同博物館では、巡回展示が日本の学校教育の中でどのように活用できるのか、その可能性を探るパイロット・スタディとして本プログラム開発を位置づけている。

沖縄での実践においては、形態・内容の異なる二つの実践をおこなった。ひとつは、「総合的な学習の時間」の中で博物館を活用した小学校での実践であり、ふたつは、博物館の中での体験的活動を主とした児童館の児童生徒を対象にした実践である。

実践1：那覇市立城東小学校の協力を得て、6年生4学級を対象に平成12年11月17日から11月30日の「総合的な学習の時間」(全9時間)において「世界に広がるウチナーンチュ」の学習をおこなった。本プログラム開発は、城東小学校第6学年担任、沖縄県立博物館指導主事と全米日系人博物館から教育プロジェクト開発・実践の協力依頼を受けたわれわれの共同でおこなった。単元目標は、次の大きく二つである。

(1)「移民の学習」を通してわたしたちの暮らしが世界の人々と深く結びついていることに気づき、同じ地球に生きる人間として、協力しあって生活することの大切さを理解する。

(2)博物館での見学を通して、自分の学習課題について、自ら進んで学ぼうとする態度を身につける。

学習した内容をまとめる活動にわれわれが関わったとき、子どもたちとの会話を通して二つの支援を試みた。すでに興味関心がひとつのテーマに集約されている子に対しては、それについての細かい質問に詳細に答え、そのことについて発表ができるような情報を十分に示した。たとえば、移民の衣食へ興味を持っている子に対して、ミックスプレートができるまでの話と着物からさとうきび栽培に適した農作業着や洋服に変わっていく様子を詳しく話して、文化変容に焦点を当てた発表を支援した。また、わかったことがたくさんある中で何を発表したらよいかわからない子どもたちに対しては、事前に製作しておいた日系移民の歴史的経験を物語る紙芝居を見せた。そうすることで、子どもたちは自分が関心をもったテーマについて、自分の解釈を含めながらストーリーラインを組み立て、視覚的に訴える発表をすることができた。「特にハワイ移民がとてもきびしい労働をしながらも、賃金を母国に送ることを怠らなかったことがすごいと思いました」という子どもの感想から、移民した人々の力強い生きざまを子どもが実感していること、「移民は日本語が通じないのにそれを乗り越えて自分たちの言葉をつくっていったところがすごいと思った」「ハワイ、日本の文化が混ざり、いろんなものや言葉が

できたことにおどろきました」というようにハワイにおける異文化交流や多文化の共生の姿に気づきました。その他の感想から自分の環境に置き換えて考えたときに異文化をもった人を受け入れようとする姿勢が育っていることが読み取れる。

実践2：本実践は、子どもが博物館展示に主体的に関わって日系人に関する学習を深めるための具体的活動の開発や支援の方法を探ることを目的として、那覇市立大名児童館の子どもたちを対象に沖縄県立博物館でおこなった。

まず、来館した子どもたちを展示室内スペースに敷いたゴザに誘導し、そこで100年前のハワイの砂糖キビプランテーションで働いていた初期移民時代の農作業着を子どもとの会話を進めながら実際に着せていき、移民当時の具体的なイメージをもたせつつ、博物館活動への意欲を高めるようにした。その後、子どもは展示を見ながら、こちらが用意した6つの活動「ミニ本をつくろう」「Q&A をカードつくろう」「フォトアクティビティ」「ハナハナウエアを着てみよう」「世界に広がるウチナンチュマップをつくろう」「ハワイのいろいろな言葉を調べよう」から自分で自由に選択して活動をおこなった。最後に日系移民の経験を概観できるように製作した紙芝居を見せた。(写真1)

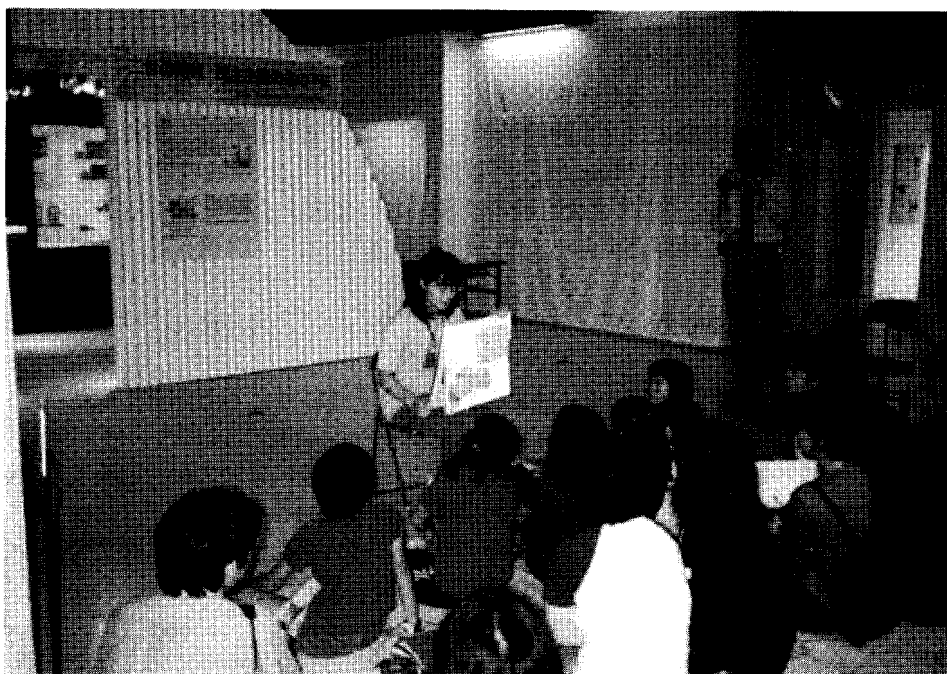


写真1 紙芝居の実演

「ミニ本をつくろう」「Q&A カードをつくろう」「世界に広がるウチナンチュマップをつくろう」の活動には中学生が中心に取り組み、展示内容に対して自分なりの課題意識をもって活動していた。一方、小学校中学年の子どもは「ハワイのいろいろな言葉調べ」

に組み、作業を通して「ハワイにはいろんな国の移民が来て言葉が混ざったことがわかった」という言語変容を視点にした文化理解を深めていた。(写真2)

以上のパイロット的実践からさまざまな課題が見えてきた。これらの課題をふまえ、展示が国立民族学博物館を始め、日本各地を巡回するのに合わせて、沖縄での先行実践を修正し、その巡回先で活用できる、より一般的なプログラムの開発を継続しておこなってきた。

国立民族学博物館での学習プログラムの実際については後に詳細を記す。

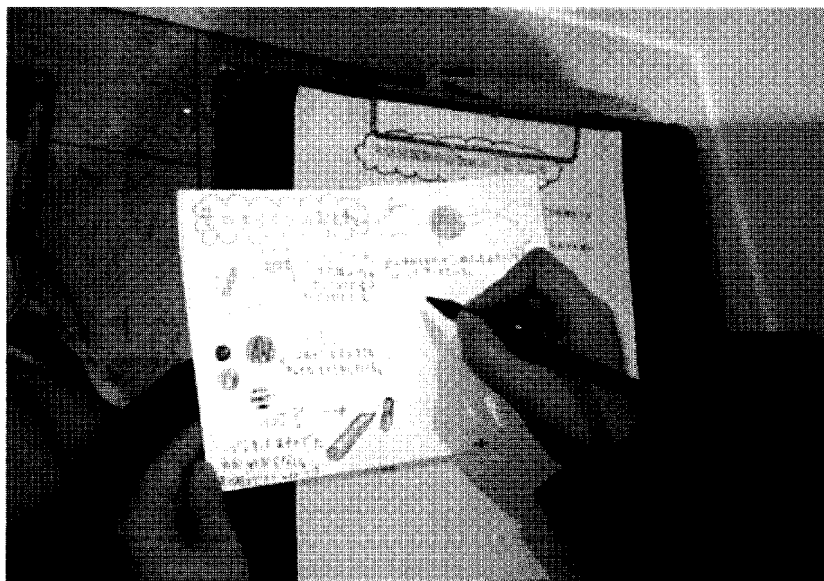


写真2 アクティビティシートの利用 1

2) 子どもの学びを支援する学習材の開発

沖縄でのパイロット実践を通して、子どもの学習を支援するための活動を用意することのよさが明らかになった。特に本展示のように社会事象をテーマとし、時間と空間が子ども自身のそれとはかけ離れているものの場合、展示に主体的に関わっての自己発見的な学びを成立させるためには、子どもへの働きかけが必要であろう。そこで、沖縄での実践から国立民族学博物館での実践に向けて、継続発展させて以下のものを用意した。

資料1 紙芝居『ハワイにわたった日系移民』(中学生～一般向け)

資料2 紙芝居『弁当からミックスプレートへ』

資料3 「ハワイのいろいろな言葉調べ」

資料4 「一枚新聞カード」

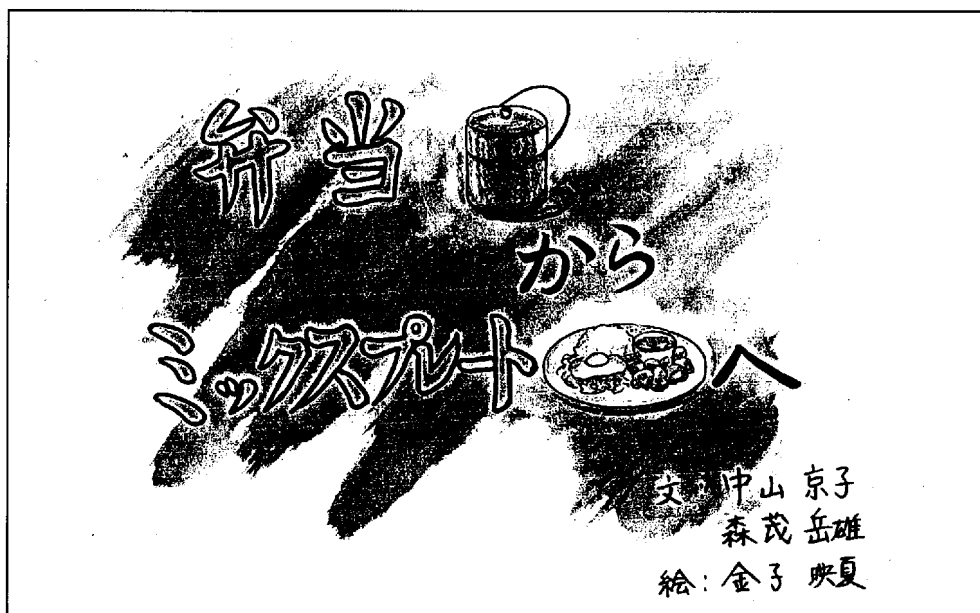
資料5 「探検ミニブック作成カード」

資料6 「Q&A カード」

(1) 紙芝居二篇



資料1『ハワイにわたった日系移民』（中学生～一般向け）文：中山京子・森茂岳雄 絵：金子映夏（全米日系人博物館監修）



資料2『弁当からミックスプレートへ』文：中山京子・森茂岳雄 絵：金子映夏（全米日系人博物館監修）

(2)ワークシート4種

ハワイのいろいろな言葉調べ

言葉	もともとは何語?	言葉の意味や説明

ハワイの言葉を調べた感想をかこう

年 名前

2001年 月 日

図に印刷希望者は 「年号からミックスプレートへ」 印刷調べ

資料3 「ハワイのいろいろな言葉調べ」 (B4サイズ ケント紙)

新聞

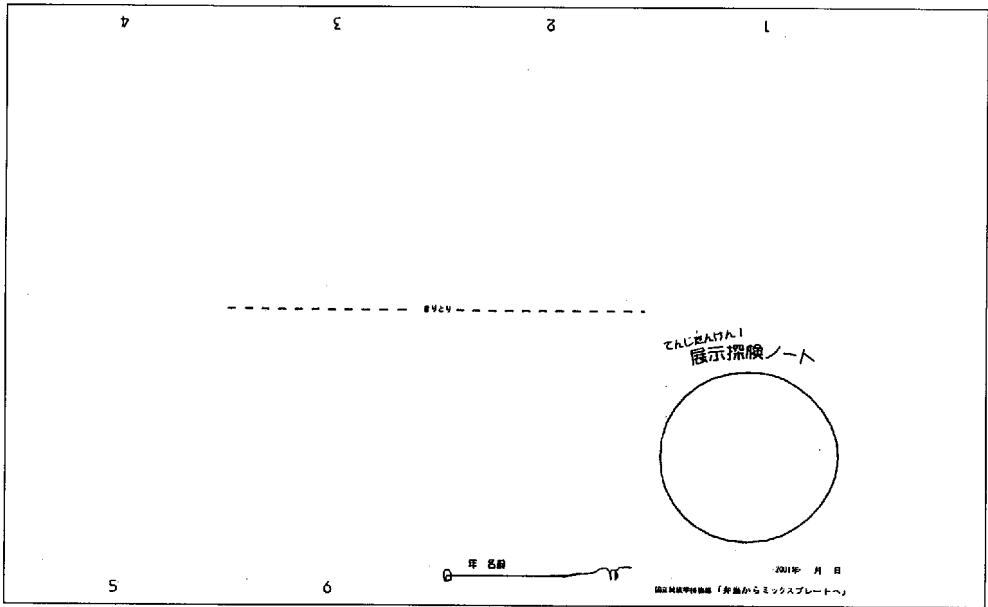
発行所
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
日本放送新聞社

新聞づくり

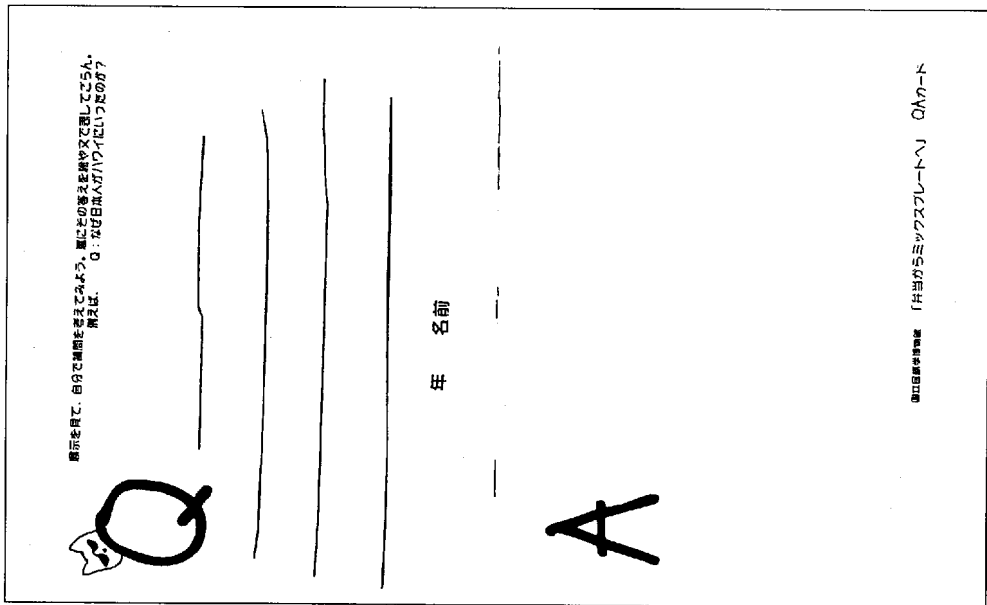
図に印刷希望者は 「年号からミックスプレートへ」 新聞づくり

マンカコーナー

資料4 「一枚新聞カード」 (B4サイズ ケント紙)



資料5 「探検ミニブック作成カード」(A3サイズ ケント紙)



資料6 「Q&A カード」(A5サイズ 裏表)

紙芝居の活用については、学習プログラム中だけでなく常設紙芝居コーナーの設置により、ボランティアや一般来館者によって活用された。積極的に活用されたことを考えると、展示空間が来館者に問いかけるものとして意味があったと言える。

学習プログラムにおいて、ワークシートを用いて展示を見ることにより、より主体的に展示に関わっていった姿が見られた。後に紹介する和歌山県から来たある高校生は、Q&A カードを活用して、「民謡などはあったのか」「ハワイはいつ頃アメリカの領土になったのか」「どれくらいの日本人がハワイへ移ったのか」「部屋の中ではくつをはいていたのか」「宗教は」「ハワイでは相撲はどうなのか」「移民した人たちはどこで教育を受けていたのか」「戦後の日系人の生活は」「昔はどんな弁当箱を使っていたのか」といった9つの問いを立て、展示を見ながらその問いの答えを探っていった。(写真3, 4)

また、「ハワイの言葉調べ」カードを活用した高校生は、ハワイの言語の多様性に気づき、そこから多文化社会に至る過程を学んでいた。(写真5) このように、ワークシートの活用によって展示に主体的に関わり、それぞれの発達段階に即した学びの姿が見られた。しかし、ワークシート類は学校から団体で来館する場合にも活用することを想定して、多部数印刷して準備したが、実際は展示をゆっくりと見学する場合のみの活用にとどまり、十分にその使命を果たすことができなかった。

見学時間の設定やワークシート類の活用への導入については、今後の学習支援の課題である。

(中山京子・森茂岳雄)

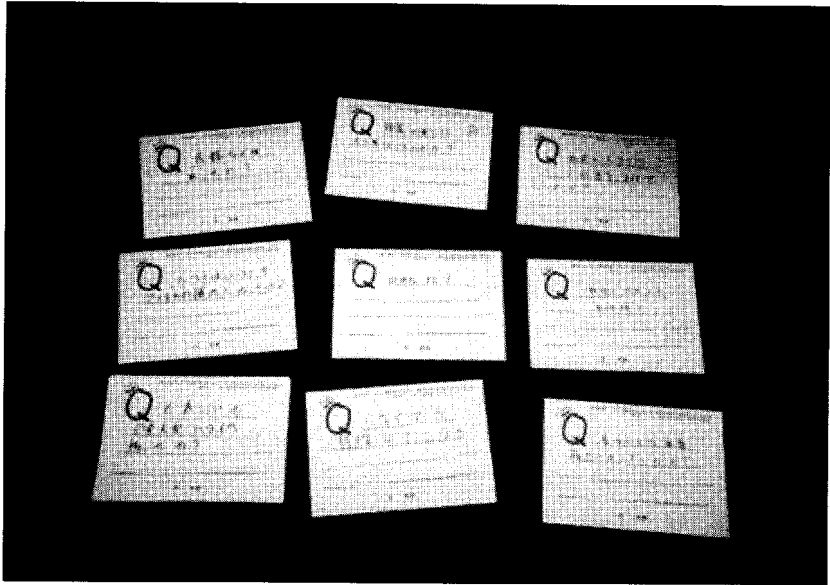


写真3 アクティビティシートの利用 2

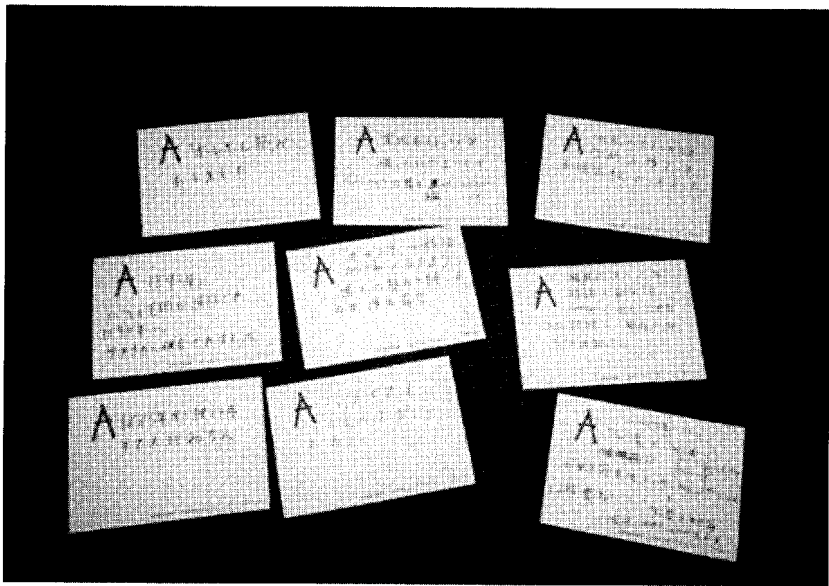


写真4 アクティビティシートの利用 3



写真5 アクティビティシートの利用 4

注

- (1) たとえば、先駆的な実践として、千葉県教育委員会は、1977年度から5年間に渡る博物館利用促進事業があげられる。この実践では、動機づけとしての博物館利用からもう一歩発展し、学習の中に博物館の展示資料や研究成果を位置づけ、3・4年生の郷土学習の一環としての博物館「千葉県立房総風土記の丘」の利用を中心に展開された。詳細は、阿由葉司「地域博物館と郷土学習—千葉県立房総風土記の丘の教育利用—」『地理』1984年、Vol.29, No.10 参照。
- (2) 『月刊みんぱく』2001年7月号

参考文献

佐藤学

- 1966 「教師の自立的な連帯へ」佐伯胖・藤田英典佐藤学編『シリーズ学びと文化⑥学び合う共同体』 東京大学出版会

阿由葉司

- 1984 「地域博物館と郷土学習—千葉県立房総風土記の丘の教育利用—」『地理』Vol.29 No.10

梅棹忠夫編

- 1983 『博物館と情報』 中央公論社

山内篤

- 1984 「民族学博物館を利用した社会科学習」『地理』Vol.29, No.10。

小山市立博物館

- 1990 『学校教育に生きる博物館活動を目指して—市立博物館の試みと成果—』

小野俊夫

- 1993 「小・中学校における『博物館学習指導の手引き』の作成」『福島県立博物館紀要』 7

藤田昇治

- 1994 「生涯学習時代の学校教育と博物館」『北海道開拓記念館研究年報』 22

古澤立巳

- 1998 「子どもを「核」にする博物館づくり—学校教育をバネにした戸田市立郷土博物館の取り組み—」大友秀明編『生涯学習体制における地域社会学習プログラムの開発に関する研究』（平成7・8年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書

栗田靖之

- 1993 「博物館と異文化教育」祖父江孝男・梶田正巳編著『日本の教育力』金子書房

芦谷美奈子・井川和道・小島道裕・鈴木有紀・高田浩二・小長谷有紀（座談会）

- 2001 「博物館を刺激的な学びの場に」『月刊みんぱく』2001年6月号

植村和代・嶋岡清行・中谷京子・中山善一

- 2001 「『総合的学習の時間』と民博」『月刊みんぱく』2001年7月号

月刊みんぱく編集部

- 2001 「博学連携学習プログラムの試み」『月刊みんぱく』2001年8月号

3) 学校関係団体へのアプローチ

a. 説明会開催まで

「弁当展」における学校団体向け学習プログラムを展開するにあたり、手始めに実施せねばならなかったのは、当然のことながら、この試みを近隣の学校関係団体を中心

に知らせることであった。まずは、「どこに」「どのように」知らせていくか。「ハワイの日系移民」という、学校教育のカリキュラムの中ではなじみの薄いテーマを掲げているということもあって、広く広報をするよりも、関心のある教育関係者に直接アピールしていく方が効率的に思われた。そこで、教育関係者を対象として「弁当展」の主旨を伝え博学連携の提案をするための説明会を開催することになった。しかし、民博は開館以来、学校関係団体の見学利用に対しては、利用者側の自主的な取り組みに委ねるという姿勢をとっており、ましてや博学連携の学習プログラムを企画することもなかったため、学校側との実質的な意味での関係は蓄積がないに等しかった。こうした具体的プログラムが企画されたときに、どこからどのようにアプローチをしていったらよいか、有効な手段あるいは連絡先という過去の実績から獲得される情報ネットワークとノウハウをもっていなかったと言ってよい。とりあえず心あたりの個人や機関に連絡をとり、本プログラムの主旨を伝え、最も効率のよい連絡先、連絡方法について助言を得た上で、国際交流・多文化教育に関わる教育関係者からなる組織に中継してもらい、届いて欲しい人々に直接連絡がいくようにした。それが多少効を奏したのか、説明会まで2週間という短期間に8人の参加を得ることができた。

b. 第1回説明会

実施日時：2001年3月3日（土） 1時半～4時

参加者：8名

公立小学校教諭1名、公立中学校教諭2名、公立高等学校教諭1名、私立中学校教諭1名、私立高等学校教諭1名、青年の家関係者2名

実施内容：

- 1) 主旨説明 中牧弘允実行委員長
- 2) 全米日系人博物館の説明と「弁当展」の内容について 三木美裕実行委員
- 3) 「弁当展」学習プログラム実施内容に関する説明—沖縄県立博物館における実践を事例に 中山京子実行委員
- 4) 質疑応答

参加者はそれぞれ、学校で異文化教育や同和教育に携わっていたり、サークル活動で多文化共生に取り組んでいたりと、テーマに関連のある教育活動を実際に手がけている人たちであったため、少数ながら手応えのある説明会になった。参加者の発言から、「ハワイの日系移民」という題材自体のユニークさについて興味をもてたとか、博物館と連携することの可能性を具体的に探ることができたといった声が聞け、それぞれ現実的課題はあるものの、将来的な礎としても挑戦する価値のあるプログラムであると認識されたようであった。

この説明会をうけて、次の「弁当展」実行委員会で、より多数の学校関係に声かけをする必要があること、その際には、1回目るときとは異なる方法でアピールをしてみること、実際に展示を見てもらい説明することができるような会を再度開催するべきだという方向にまとまった。

1回目の連絡は、テーマに関心のある教育関係者へむけたものだったが、今度は連絡の準備期間にもゆとりがあったため、逆に広く近隣にアピールをしてみるようになった。学習プログラムへの協力校を募るのが目的だが、加えて、民博が博物館として教育活動に積極的に取り組もうとしている、その心構えをアピールする意義もあった。ちょうど年度変わりで学校側も年間のスケジュールを検討する時期にあっていたので、そのタイミングを利用して、茨木市、吹田市の全小中学校学校長に宛て、「弁当展」の一般向けチラシ、「弁当展」と学習プログラムの概略を説明したものなど各種資料と第2回説明会の案内を送付した。ところが、その結果、参加という返答をいただいたのは、4校からの6名の教育関係者のみ、そのうち2校は第1回説明会に参加された方々なので、この案内文による勧誘ではじめて参加されたのは実質2校になる。

c. 第2回説明会

実施日時：4月25日（水） 3時～4時半

参加者：6名

公立中学校教諭4名、私立高等学校教諭2名

実施内容：

- 1) 主旨説明 中牧弘允実行委員長
- 2) 「弁当展」見学
- 3) 「弁当展」学習プログラム実施内容に関する説明—沖縄県立博物館における実践を例に 森茂岳雄実行委員、中山京子実行委員
- 4) 質疑応答

先述のように、4校のうち、半数は第1回説明会に引き続く参加である。最初は個人としての参加だったが、2回目は勤務先の学校を代表して、実際の展示を見ながら、その可能性を具体的に探るといった目的が強かったようだ。他の2校は、ごく近隣の中学校であり、今回の「弁当展」に限らず、将来的に民博という博物館を学校教育の中で、どう利用できるのか検討の材料にするという姿勢でのぞまれていた。

それぞれ目的は違うが、実際の展示を見ながらの説明と懇談は、学校側にとってもプログラムを自らに引き寄せて具体的に考える上で意義のあるものだったに違いない。

d. 学校主体という基本姿勢

2回の説明会でわれわれが重視したことは、各学校団体の目的や流れを優先するということだった。子どもたちも一人ひとり違いがあるように、学校にもその特性がある。「学び」の主体が子どもたち自身にあるならば、彼らが所属する学校の方針や基本的なカリキュラムというものを無視することはできない。博物館での学習プログラムはあくまでもその流れの一単元にすぎない。今回の博学連携学習プログラムが民博にとっても初めての実験的経験でもあるため、こうした主体優先の姿勢はプログラムの構成や内容は言うに及ばず、学校側と博物館側の関わり方についても貫かれた。つまり、このプログラムを博物館側に全て委ねるか、学校側が主体となって博物館側はそのサポートをするか、あるいは、企画の段階から両者の話し合いを重ねて構築していくかといった連携

のあり方そのものも学校側に委ねる方針をとったわけである。

e. 今後の課題

第2回説明会への参加者数は、タイミングを考慮し、100に及ぶ学校関係団体に案内したにもかかわらず、期待を大きく下回ってしまったのはなぜだろう。また、下見にくる学校関係者に学習プログラムへの参加を呼びかけるチラシを配布するという広報活動も平行しておこなったが、全くといっていいほど反応がなかったのは何が原因なのか。

窓口になった民博側担当者が個々の学校と連絡を取り合い、ときには断られるなかで、耳に入ってきた現場の声やプロジェクト遂行後のインタビューでの担当教師の意見を聞くうちに、学校側のさまざまな事情や本音が明らかになった。

まず、「ハワイの日系移民」というテーマそのものに原因がある。確かに、そこには「多文化共生」という学校教育で重要視されている今日的なテーマが潜んでいるし、われわれもそれをアピールの主眼に置いたのだが、教育現場にとってみれば、子どもたちにとって身近な話題から学習を深めていくという教育理念上の本流があり、その流れを故意に変えることは現実的とは言えなかった。「ハワイの日系移民」という課題を見据えるためには、100年前に歴史を遡らねばならず、また、「日本」と「アメリカ」「ハワイ」の歴史的関係性についても棚にあずけておけるものではない、そういった時空間の隔たりが、このテーマを子どもたちの学習プロセスにそわせるのに、無理があるという。

次に、時期の問題がある。この企画が秋であれば、もう少し可能性があっただろう、という声をよく耳にした。こうした大きなプロジェクトは、学校にとってみれば少なくとも3ヶ月前に予定されていなければ、実際の運営上無理がある。今回は、4月中旬から8月末までという展示期間であったため、4月初めに連絡をもらったものの、すでに組まれている1学期の予定を組替えることは非常に難しい。下見に来館した学校団体にチラシを配布しても、全く反応がなかったのは、この理由によるところが大きいと考える。また、後の学校へのインタビューで明らかになったことだが、こうした博学連携の学習プログラムは、1年のどの時期にそれが企画されようが、年度当初の4月初めに最初の連絡がいくのが、学校側にはもっとも都合がよいようだ。今回のような1学期の企画の場合は、3ヶ月前の1月には連絡をとり始め、年度がかわった4月にも再度連絡をいれなおすのが、効果的だったのではないだろうか。

最後に、些細なことではあるが、連絡先についてももっと注意を払う必要があることもわかった。学校という同じ組織でも、実質上の担当者と所属長、その両方にそれぞれに最初の連絡がいくよう取り計らうのが理想的である。同様の案内が大量にやってくる所属長のところだけでは、流れてしまうおそれがあるし、反対に担当者だけでは、学校として取り組むことを考える場合アピールが弱い。適切な時機をねらって、担当者にも所属長にも同時に連絡がいくのがもっとも望ましい。

正直なところ、手探りの相手校探しだったが、次に記すように、結果的に多種の学校団体と多様な取り組みを実施することができたし、知らせるという活動についても、伝えたいところに伝えたいことを効率よく届けるにはどうしたらよいか、そのノウハウを蓄積できたように思う。

4) 博学連携学習プログラムの実施状況

今回の「弁当展」においては、実際に学校関係6団体の連携協力を得て、学習プログラムを実施することができた。それらが、結果的に小学校から高等学校までという対象に幅のある実例ができたこと、また、位置づけについても、かたや総合学習での取り組み、かたや学年や教科の枠組をはずしたサークル活動での取り組み、あるいは地域の複数の中高等学校からなるセミナーの一環として、多様な姿勢での実践がのぞめた。これは、民博にとっても博学連携の実験的な試みとしては、幸運な出会いであったといえよう。

以下、各団体の学習プログラムを時系列にそって、列記してみる。

見学日時	学校名	位置づけ	事前授業の有無 時間数	事後授業の有無 時間数
5/20	同志社中学（1回目）	サークル活動	なし	なし
6/7	茨木市立三島中学校	総合学習	1H	10H
6/11	吹田市立北山田小学校	総合学習	2H	10H（博・支援）
6/19	雲雀が丘学園中等学校	校外学習	なし	なし
6/21	豊中市立克明小学校	総合学習	2H	9H（博・支援）
7/12	同志社中学（2回目）	サークル活動	なし	10H（博・支援）
7/31	和歌山県下中等学校	国際理解セミナー	なし	なし

注：（博・担当）は、博物館が主導したこと、（博・支援）は学校が主導し博物館が支援したことを示す。

先述のように、学校と博物館の連携のあり方や全体のカリキュラム構成は、はじめの段階で学校側に検討してもらい、われわれはその意向にそってそれぞれの学校団体について対応した。表からも明らかのように、その位置づけの違いから傾向が大きく2つに分かれた。総合学習としての位置づけで取り組んだ学校は、見学をはさんで学校での事前学習を1～2時間、および見学後の事後学習を9～10時間という似たような時間配分のカリキュラムを組んでいる。また、事前学習は学校側で内容を検討・実施し、見学については博物館側に委ね、事後学習は学校側で展開し博物館側はサポートするという形態が多い。また、サークル活動など授業時間枠などにあまり拘束されない緩やかな態勢で取り組んだ学校も同数の実施例があった。これらは、事前授業をせずに、まず展示見学を実施し、見学の導入などは博物館側が主導した。具体的な事後学習を展開したのは1校のみという結果におわった。

学校側によるこの位置づけの相違が、構成やプログラム内容だけでなく、子どもたちの学習状況などに少なからず影響を与えたことが明らかになった。その点については、後の項目で検証していきたい。まずは、各団体のプログラムの大まかな実施概要を、総合学習と課外学習の2つのケースに分けて整理し、次ページに提示する。

＜総合学習の取り組み＞

校名	人数	目的	プログラム全体構成	見学の内容
茨木市立三島中学校 2年	35	・人権学習 ・多文化共生	<p>＜事前学習＞</p> <p>6/1に1時間図書室にて、講義形式の事前学習、ハワイを中心にした日系移民の歴史や経験を写真や強制収容所などをテーマにしたビデオ、さらに仕事着など「もの」を通して学び、見学への意識を高める</p> <p>＜事後学習＞（担当クラス担任） 約5時間</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他に見学に行ったクラスの仲間とクイズ形式で発表しあう ・夏休み中に再び個人見学 ・再度グループ編成、表現方法を再構成し、10月末の文化祭で発表 	<p>大阪再発見人権ウォーク 全学年が6コースにわかれて学習、本グループは「リパティールおおさかと民博」という1日行程</p> <p>＜導入＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・展示場中央にて、事前学習の振り返り ・ボランティア扮する日系一世へのインタビューや寸劇の手法をかりて導入 ・タイトルの意味についての説明 <p>＜見学＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各自が自由に見学、学校が用意したメモに気がついたことをメモしていく ・最後に、お互いが興味をもったことを話し合う ・ミックスプレートを試食する
吹田市立北山田小学校 5年	77	・食を通して一人のつながり ・食を通して一人のつながり	<p>＜事前学習＞（担当クラス担任） 6/7に1時間</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハワイについて、知っていることの確認 ・人に聞いて調べる方法を身につける ・弁当展のリーフレットから、民博見学への動機づけ <p>＜事後学習＞ 10時間（途中段階で2時間、博物館側が学校に訪問支援）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・興味があったテーマに応じてグループ編成し関連資料、インターネットなどで調べ学習 ・学年のほかのグループ同士で発表 	<p>＜導入＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前学習のおさらい ・モジュール「ガレージ」前にてガレージの様子、展示物からわかることを話し合う ・先生や子どもたちを巻き込み、寸劇の手法をかりて、さとうきび労働の様子を想像させる <p>＜見学＞</p> <ul style="list-style-type: none"> 個人で自由に見学 QAカードに感じたことを書きこむ ミックスプレートの試食
豊中市立克明小学校 6年	62	・多文化共生 ・博物館に親しむ	<p>＜事前学習＞1時間（担当クラス担任）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チラシのミックスプレートの写真や昼食風景の写真を見ながら、気がつくことを話し合う ・なぜさまざまな国の料理がのっているか疑問をもたせる ・ハワイについて知っていることを引き出す <p>＜事後学習＞ 約5時間（担当クラス担任）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共通の興味をもったもの同士でグループを組みテーマを設けて調べ学習をする ・調べるなかで生じた疑問点は、ファックス、電話にて民博へ問い合わせる。 ・まとめた後、クラス毎に発表会一壁新聞などを見せながら解説という形式が多い 	<p>＜導入＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・展示場中央にて、事前学習の振り返り ・ハワイのスーパーマーケットのパッケージを配布し、気がついたことをみんなで共有しあう <p>＜見学＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人で自由に、気がついたことをメモする ・目的を見失っている子には、声かけをし、紙芝居を見せたりして、積極的に取り組むよう仕向ける ・友だちどうして何に気がついたか報告しあう ・昼食には、家庭で用意してきたおかずを友だちと交換しあい、模擬ミックスプレートをつくりながら食べる

資料7 総合学習の取り組み

＜時間外学習の取り組み＞

校名	人数	目的	プログラム全体構成	見学の内容
同志社中学校 クラブ活動	11	多文化共生	<p>＜事前学習＞特になし</p> <p>＜事後学習＞特になし</p>	<p>(1回目見学)</p> <p>＜導入＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハワイのイメージを確認、スーパーのキットを使い、気がついたことを話し合う ・移民の話、ハナハナウエアを試着、改造の工夫と労働の大変さを伝える ・昼食はレストランにてミックスプレートをとる <p>＜見学＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・午後から自由行動アクティビティシートを自由に選ぶ ・最後に高校生の作文の読み聞かせ。それについての感想を述べ合う
	9		<p>＜事前学習＞特になし</p> <p>＜事後学習＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・9月下旬の文化祭で発表の予定。 ・発表を意識した取材、ビデオなどに展示の紹介風に取材をしたり、常設展示のハワイの生協との関連に焦点を当て取り組んだ 	<p>(2回目見学)</p> <p>＜導入＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・モジュール1「ガレージ」前にて、ガレージの資料から読み取れることを話し合う <p>＜見学＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行動展示場をビデオ撮影するグループ、ハワイのローカルの文化を見に行くグループなどにわかれて、文化祭での発表を意識した調べ学習
雲雀ヶ丘高等学校 2年	12	多文化理解	<p>＜事前学習＞特になし</p> <p>＜事後学習＞特になし</p>	<p>＜導入＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「宝さがし」キットを使い、探してきたものをお互い話し合い、ふたりずつわかれて、ファッション、紙芝居、スーパー、ガレージへ、スタッフ、ボランティアがそれぞれの支援をおこなう ・そのあと合流しお互いの気づきについて話し合う <p>＜見学＞</p> <p>その後、常設展示見学へ</p>
和歌山県下中等高等学校	高26 中3 留学生 3	多文化理解	<p>＜事前学習＞特になし</p> <p>＜事後学習＞特になし</p>	<p>1日見学を午前（研修A）、午後（研修B）に二分</p> <p>研修A：展示見学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・導入講義「多文化社会に生きる」 ・展示の構成などの説明 ・自由見学（その間アクティビティシートなど自由に利用） ・その後、グループに分かれ、感じたことを話し合う <p>研修B：講義</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「和歌山からの移民の歴史的経験を知る」 <p>第4セミナー室にて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各自ミニレポート作成

2. 総合的学習における学習プログラムの取り組み

—大阪府茨木市立三島中学校を事例に

1) 茨木市立三島中学校との博学連携

茨木市立三島中学校（以下三島中学校と略す）は国立民族学博物館から地理的にも比較的近く、学習プログラムの学校向け説明会での出会いがきっかけとなり、博学連携が実現した。博学連携の可能性とその意義をふまえ、担当教師を中心に学校側でどのようなかわりが可能か検討をした結果、2年生を対象に学習プログラムを実施する運びとなった。

同校では、「さまざまな体験を通して生き方を考える人権総合学習」に取り組み、その学習において「職業体験」「学校探検隊」「多文化共生」「地域学習」をキーワードに地域とともに作る総合学習を進めている。1年時に活動「にんげんフィールドワーク in 茨木」「平和学習 沖縄」「多文化国際理解」を学習した生徒が、2年時での活動「人間フィールドワーク in 大阪 ー大阪再発見 人権ウォーク」を開始した。この活動では A「ぬくもりの街向野」 B「わたしも西成の街で生きたい」 C「住吉の街 人に優しい人権の街」 D「沖縄の風を感じる街 大正区」 E「生野区コリアン文化を体感しよう」 F「リバティおおさか and 国立民族学博物館」の6つのコースに別れて大阪を人権の視点から学習した。本学習プログラムは、Fコースの中で実施され、コース別活動の時間を活用して全米日系人博物館と共同で本展示の学習プログラムを作ってきた中山が事前授業を1時間実施し（6月1日）、吉荒が博物館見学（6月7日午後）の支援をした。その後、各コースごとの見学のまとめや発表を継続して参観し、学習プログラムの成果を追跡した。

三島中学校との連携においては、学年を解体したコース別活動の一環としておこなわれることから、数時間にわたるカリキュラム実施にはいたらなかったが、見学当日だけではなく事前事後学習においても積極的に連携することができ、生徒の学習活動を支援するのに効果的であった。三島中学校担当教師からは博学連携の取り組みについて、「中学校教師だけではうまく説明できない内容を事前学習や実物を使った説明、ミックスプレートの再現などでわかりやすく説明していただいた。さらに、展示終了後も展示物の貸し出しなどもしていただき、学習の深まりと広まりがあった」と高く評価された。事前事後にかかわって学習を支援することや教材提供が可能なことなどが理解され、その実施につながったことは2回の説明会を開催した成果と言えよう。

反面、課題となった点もある。国立民族学博物館や学習プログラム支援者との連絡にあたった教師と、この学習プログラムを活用して授業を担当する教師が別であったことである。今回は、学年を解体して選択制コースが設定されている中での博学連携となったため、さまざまな事情により事前連絡担当者と授業者が異なることとなった。2回の説明会と事前連絡を通してそれぞれの理解を深めることができたものの、事前学習当日に担当教師と対面することになり、共通理解がはかれなまま実践をおこなうことに

なった。このことは後日実施した三島中学校へのヒアリングにおいても「今回は電話やメールで連絡をさせていただいたが、この形がよいと思います。ただ担当者と連絡係が別々だったことが申し訳なく思います」「学校側の事前学習が不十分であった」と指摘されている。展示、学習プログラム、主旨を理解していただき、相互理解がはかかれている状態で連携をすすめることが、効果的であると考え。指導する教師がなげかける言葉や指導によって事前学習への心的学習準備状況も向上することが予想される。

以下に、事前授業、博物館見学、その後の様子の実際について詳細を記す。

2) 事前授業

先に記した事情により、複数時間にわたる単元化にはいたらなかったが、見学前に生徒の見学への意識を高め、展示のテーマに迫るための貴重な時間となった。当日の授業の内容として、次ページに指導案を示しておく。

博学が連携する形で初めて博物館見学を実施する中学校としては、教師も生徒も外部と関わって事前学習をすることに慣れていない感もあったが、多くの生徒は事前学習によって展示や見学への自分なりの視点を見いだすことができた。

<事前学習後の生徒の主な感想>

- そのときおかずを交換したから、日本にも洋食があるんだろうか。
- 主にいろいろな国の食事を盛っているミックスプレートの盛り方など。
- お弁当の中身の何を交換したのか。
- 日系人の普段の食事が知りたい。
- いろんな料理をのっけてるミックスプレートってイメージがよくわからないから 調べたい。
- 弁当のことで、もとは昼の弁当交換からはじまったことが分かった。
- 外国人はこの時代にどんなものを食べていたのか知りたい。
- 昔のことをもっと知って、当時の生活の様子を調べたい。日系人の思いなども知りたい。
- 今、自分たちが食べている食事でも昔では考えられない物ばかりだったから、他の生活でもどのようにして工夫していたのかを知れたらいいなあ、と思う。
- ハワイへ移民した日系人の人たちの生活の様子や、そのときの歴史の中ではどのようなことがあったのか？あと現在日系3世または4世としてハワイで住んでいる人たちの様子などを詳しく調べていきたいです。
- 言葉をどうやって理解して仲良くなったのか？何を交換したのか。
- 国立民族学博物館にいったら、今日お話してもらったお弁当箱を見たいと思う。
- 展示されている物や服などをみたり話を聞いたりしたい。
- 二世の時代について詳しく知りたい。
- 日本の文化と外国の文化がまざっている新しい文化をみてみたい。
- 昔の服装とかを重点的に調べたい。

＜茨木市立三島中学校＞

総合学習：全米日系人博物館巡回展示見学事前学習授業案

対象：茨城市立三島中学校 2年生35名
日時：2001年6月1日（金）第5校時
授業者：中山京子

本時のねらい：ハワイを中心とした日系移民の歴史や経験を写真や具体物を手がかりにして学び、博物館展示見学にむけての意識を高める。

	予想される学習活動・内容	指導上の留意点・資料
発見	<p>○2枚の写真から考えよう この写真はいつ、どこのもだろう。 ＜写真1＞ 1885年 ・着物をきているから江戸時代。・お釜で調理している。 ・場所はよくわからない。 ＜写真2＞ ・広い田んぼがある。 ・水田の後ろの山を見たことがある！もしかして、ハワイ？ ・ハワイでお米を作っていたの？ ・この時代に日本人がたくさんいたのか？</p>	<p>・2枚の写真を見やすいように拡大して提示する。導入での思考から授業を展開したい。 ＜写真1＞1885年、ハワイ・ホノルルの千人小屋で調理をする日本人女性「そこではやわらかな砂に掘った穴の中で燃える火にかけた風変わりな美しい形の器で、料理が行われていた。この人達は肉を食べず、魚を主として食べている、米を主食とするが、野菜を好む。」（デイリー・パンフィック・コマーシャル・アドバイザー、1885年2.10） ＜写真2＞ダイヤモンドヘッド付近の水田（1910年頃）現在のハワイの観光パンフレットなどにあるダイヤモンドヘッド周辺の風景を対比して示すことよい。</p>
問題の意識化	<p>●どうして日本を離れて移民をしたのか。 ・ハワイや外国に行ってみたくてと思ったから。 ・日本にいるよりいいくらいできると思ったから。 ・明治政府が移民をすすめたから。 ・移民会社があったから。大きな都市にはの移民会社があった。 ・経済的に苦しくて外国で働いて少しでも楽になりたかった。</p>	<p>・移民の背景に着目させ、想像上の理由と資料からの事実の両方をおさえる。</p>
追究1	<p>●ハワイでの生活はどのように変わっていったのだろう。 ＜着物からハナハナウエア、そして洋服へ＞ ・最初の頃の写真ではみんな着物をきていた。 ・野良着を日本風から「ハナハナ」（高帽子、かすりジャケット、股引ズボン、たび）スタイルに変えていった。どうしてこのような服ができあがったのだろう。（資料2-3） ・街の中で洋服をきるようになった人も多かった。学校に通う子どもはほとんど洋服をきている。 ＜弁当からミックスプレートへ＞ ・「カウカウ」とはハワイ語で昼食を意味する。カウカウタイムはプランテーションのランチタイムのこと。日系人もカウカウタイムと言っていた。 ・ハワイにはどんな人達がいたのか。カウカウタイムを通してどんな国際交流がすすんだのだろう。 ・日本人は昼食としてアルミ製の2段重ねの弁当箱を持ち、下の段に白いご飯、上の段に日本のおかずを入れおかずの交換をしていた。 ・農園の他の国からの移民とおかずを交換しあって、食べ物の交流がすすみ、現在のハワイの「ミックスプレート」になった。これには必ず白いご飯がついている。 ・日本人は自分たちの食べ物を変化させていった。</p>	<p>・博物館展示から弁当カンや農作業着を用意し、具体的なイメージをもちながら話を理解できるようにする。 ・その他写真資料などをフリップにして提示する。（実物投影機があれば活用する。） ・展示のテーマである「弁当からミックスプレート」についていねいに扱い、全米日系人博物館展示の見学への関心を深められるようにするとともに、多文化共生のよさを実感する場面としたい。</p>
追究2	<p>●第二次世界大戦時日系人はどのような経験をしたのだろう。 ・日米対戦時、日系人はどんな生活をしたのだろう。 ・日系人であることを理由に差別されたときにどんなことを考えただろう。 ・日本生まれの移民とアメリカ生まれの子どもは、どちらを自分の国と思ったのだろう。 ・強制収容についてどう思うか。 ・よくが二世の子どもだったら、。。。 ・日本兵になった兄と米兵になった弟の苦しみ。 ・戦後日系人はどうしたのか。アメリカはどうしたのか。</p>	<p>・戦時中の日系人の経験について図書を紹介し、戦争中の日系人の経験について事実を伝える。 ・二つの国の間に挟まれた日系人の願いを切り口に戦争をみつめたい。（ビデオ資料の活用） ・戦後の日系人の補償運動とアメリカ政府の対応について説明する。</p>
まとめ	<p>●日系移民の生活の変化や戦争時の経験について、自分の考えをまとめよう。</p>	<p>・授業についての感想を書き、どこに関心が集まったのか把握し、博物館見学の事前準備に生かす。</p>

評価：（子ども）日系移民の歴史や経験について、資料や具体物を見て考えながら話を聞き、博物館展示見学にむけて自らの関心を深めることができたか。（教師）学習者の思考を大切に授業を展開することができたか。

資料9 指導案

生徒が書いたこれらの感想から事前授業の評価をすることができる。同時に、生徒が事前学習で何に関心を持ったのか知ることで、学習者の興味関心を生かした博物館見学の環境作りやそこでの活動を準備することができる。例えば実際に、「ミックスプレートのイメージがわからない」「服装のことを重点的に調べたい」という言葉から、見学当日に、写真資料だけでなく博物館レストランから「ミックスプレート」を実際に用意した。また、農作業着に焦点を当てた導入を準備した。博学連携を考えると、一方的な博物館からの出張授業であったり、教師からの依頼では不十分で、よのように、学習者の意識の連続を主とした連携が大切なのである。

(中山京子・森茂岳雄)



写真6 事前学習の授業風景1



写真7 事前学習の授業風景2

3) 博物館見学

a. 博物館で学ぶこと

生徒自身が感じたり考えたりするためには、まず「もの」をよく観察し、そこから「考える・想像する」という学びの姿勢を身につける必要がある。日頃、民博の常設展示場で、「もの」の前で足を止めず、課題意識を十分に持てないまま、ビデオテークのコーナーで漠然と過ごしている子どもたちの様子を目にする度に、「博物館の学び」とはどのようなものか、彼らはおろか、実は学校側も正しく理解していないのではないかという疑問を感じていた。「博物館の学び」は、子どもたちの自主的な学習の芽を育てるという教育の根幹にも関わることであり、来年度から本格的に導入される「総合的な学習の時間」のねらいにも通じている。この博物館見学に対して、そうした意識をもち、取り組むことは学校教育にとっても意味のあることである。その共通認識のもと、この展示のタイトルである「弁当からミックスプレートへ」そのもののメッセージを、親しみやすい形で提示しつつ、同時に、子どもたちといっしょに「もの」を観察し、子どもたちから言葉を引き出し、そこから考え想像するといった学びの姿勢を身につけることを目指して見学の導入を実施した。

b. 見学の流れ

本見学は、35人という比較的小規模であったことと、見学時間が約1時間半と制約があったため、導入、自由見学、まとめという簡単な流れを全員一斉に実施した。先に提示した全プログラムの概要を表にしたものと重なるところがあるが、時間軸にそっ

てその活動の内容の詳細を記す。

＜見学当日の活動行程＞

	時間	博物館側教育内容	子どもたちの活動
	午前中		リパティ大阪見学・移動
導入	13:30	<ul style="list-style-type: none"> ・事前学習の内容を確認する ・ボランティア扮する日系一世にインタビュー、寸劇の手法をかりて導入をはかる ・ボランティアが着た仕事着をよく観察させる ・さまざまな移民があった事実を示す ・ミックスプレートの背景の意味を示す ・自由見学でも、「もの」をよく観察して、そこから何かを学ぶよう促す 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前学習で何を学んだか振り返る ・仕事着を観察する ・仕事着から日系人の生活を想像する ・寸劇を見ながら、日系人の生活や共生について共感的に考える ・ミックスプレートの意味を知る
自由見学	14:30	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館側スタッフ、ボランティアや引率の教師とともに子どもたちの自主的な学びを支援する 	<ul style="list-style-type: none"> ・個々人で自由見学をする ・学校側が用意した見学シートに気づいたこと感じたことを書きこんでいく
まとめ	15:15 終了 16:10	<ul style="list-style-type: none"> ・個々人の見学の体験を他者に伝えたりすることで、経験を定着させる ・ミックスプレートを全員で試食する機会を設け、博物館での体験をより豊かなものにさせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・再度集合し、友人同士で感想を述べ合ったり、書きこんだシートを確認したりする ・ミックスプレートを試食する

c. 内容や構成のねらい

子どもたちは、事前学習で既にハワイの日系移民についての情報や知識を得ており、博物館では何を見学できるのか、何が学べるのか、それぞれに興味やイメージをふくらませて民博を訪れた。事前学習から1週間が過ぎていることもあり、まず、見学の目的を確認しなおす必要があった。事前学習でとりあげられたキーワードを提示するなど、なるべく子どもたちが自発的に回想できるように配慮した。

次に、仕事着を身につけ一世に扮したボランティアにインタビューする形で、子どもたちの声を引き出しながら、想像したり考えたりする場を設けた。特に、ボランティアが着用している仕事着にポイントをおいて、着物との違いを考えさせたり、それを改善した具体的な工夫から、新しい環境に順応していく人々のたくましさを想像させた。

また、弁当交換を説明する場面では、引率教師の協力を得て、言葉を超えてどのように交流がおこなわれたかを芝居の手法を借りて学ばせた。芝居形式をとったのは、楽しみながら学ばせることのほかに、それを鑑賞することで子どもたち自身も疑似体験し、自らに引き寄せて問題を考えて欲しいという意図があったからだ。即興で教師をとりこんだときは、役者たちのやり取りに興味をもって注目しており、多くの生徒は、事前学習で知った「弁当からミックスプレートへ」というタイトルのもつ意味を具体的に理解した。



写真8 見学・導入1



写真9 見学・導入2

自由見学では、生徒は学校側が用意したワークシートを手に、気がついたことを記入しながら、さまざまなアクティビティキットに触れ、見学を楽しんでいたようだ。その間も博物館のスタッフやボランティアが質問に応じたり、仕事着の試着を手伝ったり、臨機応変に対応した。

自由見学後、発見したことや感じたことを友人同士で話し合った。心に浮かんだことをその場で言葉にし、他者に伝えることで見学体験が定着し、さらに深まるきっかけになるからである。

また、最後に、あらかじめ注文してあった二皿の「ミックスプレート」をレストランのシェフ自らに運んでもらい、シェフにどんな種類の料理がのっているか、どういうところに工夫したかなど、子どもたちの前でインタビューした。その後、全員に少しずつ試食させ、「ミックスプレート」そのものの味覚体験で見学の終止符をうった。



写真10 自由見学の様子



写真11 ミックスプレートの試食

d. 子どもたちの様子

見学当日は1日に2館訪問というスケジュールになっていた。結果的には、これはかなり無理を強いる行程だった。大阪市大正区のリパティ大阪と吹田市の民博といった距離を移動せねばならず、加えて、展示やメッセージであふれる2つの博物館を見学するという点で、身体的にも精神的にもかなり負担が大きかったに違いない。これは、裏返せば、学校側の今回の取り組みへの積極的な姿勢の表れだろうが、主体である子どもたち自身が疲労を覚えて、学ぶゆとりもないのでは本末転倒であるといわざるを得ない。このスケジュール構成の失敗は、後述するように学校側も反省点としてあげている。

実際、子どもたちはかなり疲弊したコンディションで民博を訪れた。とりあえず館内に招き入れ、展示室のほぼ真中に敷かれたゴザの上に全員を座らせ、先のような導入をはかったわけである。彼らの周りを回って、彼ら自身の声を引き出すのだが、やはり気持ちを切り換えるゆとりがないのか、積極的に参加していたのは一部の子どもたちだけであった。それでも、引率の先生をアドリブで芝居に取り込んだあたりから、ほぼ全員が関心をもって注視するようになった。自由見学においては、導入に予定外の時間をとりすぎてしまい時間が短くなってしまったが、一人ひとり積極的に見学をしていたし、ミックスプレート試食のときにはすっかり元気を回復させていたのには言うまでもない。

ところで、見学後に書かれた感想文から、見学時の外見の様子からはわからない子どもたちの気づきを見ることができる。

「収容所にいられていた人のことを聞いて昔にこんなことがあったなんて知らなくて、苦勞をしているんだなと思いました」

「ハワイ社会の一員として長年貢献し、アメリカの精神を身につけていたのに日本の宣戦布告によって忠誠心を問われるなんてきつと当時の日系人の人たちでなくても、怒りを抱くと思います」

この学年の子どもたちは1年時より、人権問題や多文化共生に焦点を当てた学習を積み重ねてきたことは先に述べたとおりである。その間には、在日韓国朝鮮人の問題にも触れているが、同様の人権問題が、日本人にもふりかかっていた事実をおそらく初めで知っただろう。その事実に対する驚きとともに、それを共感的に感じとっている様子がわかる。しかし、子どもたちの視線は、差別や戦争など苦しい体験や、深刻な問題だけに注がれているわけではない。

「一番の楽しみがお昼ごはんときいて、ああ、こんなにつらくて苦しい労働でもやっぱりご飯のときは、友たちと楽しく食べれるんだ、と思いました」

「ぼくは、いろいろな国からきて、話す言葉もちがうのにどうして仲良くなっておかずを交換できたのかなと思った」

「多くの日系人は強制収容所に入れられて苦しうだったけど野球のチームができたして、そのときの日系人の人たちは笑顔であふれていました」

人々は過酷な現実を乗り越えて、どのように他の民族の人々とつながっていったか―彼らは、短時間の間に、「弁当からミックスプレートへ」のメッセージをきちんと嗅ぎ取っているのである。「笑顔であふれて」は、写真がとらえた人々の顔をよく観察することができたからこそ、湧き出てきた言葉である。野球チームのことに触れた発言は、他にもいくつか見られる。これらは、事前学習で見た野球を媒介にした再会のビデオが印象に残っているからだだろう。1週間前の事前学習が展示されたユニホームや写真を見ることで、子どもたちの中で生き生きと結びついたようである。

ところで、感想文の中で、もっとも頻繁にでてくるキーワードは、やはり、「ミックスプレート」と「仕事着」である。事前学習や見学導入の段階でポイントをおいていっしょに観察した「仕事着」と、見学の最後に試食した「ミックスプレート」についての発言が多かったことから、この学習プログラムが子どもたちの博物館の学びをより豊かなものにしたことがうかがえよう。

「作業着にさえ、オシャレをしたり、とってもユニークな感じがしました」

「昔の人はどんなに暑い日であろうと、少しでも仕事がしやすい服装をして働いたことがわかった」

「着物を切ってまで仕事しやすい服を使っていたのには、おどろいた。きつと何らかの重大な決心をしていたんだと思った」

「ぼくは、ミックスプレートを食べて思ったことは肉、豚、鳥はとてもおいしかった。いろいろな国の料理を食べれて少し昔の人になれた気がしました」

「ミックスプレートはおいしかった。当時の人たちは各国の料理の味づけがからか

ったりしたらどうしたのだろうかと思った」

「日系人たちは、つらい砂糖きび畑で働いた後の弁当が一番の楽しみだというのが分かった」

当時の人々が、苦労の中にも、おしゃれという精神的なゆとりを持ち得たことのすばらしさに気づいたり、仕事のためとはいえ、どんな思いで着物の袖にはさみをいれたのか共感的に思いを馳せた子どもたちは、ただ表面的な言葉による情報や知識だけでは嗅ぎとれない、「もの」の裏に隠れた「人」というものを身近に感じることができたに違いない。「ミックスプレート」もしかりである。ミックスプレートを実際に食べてみたら辛かった。100年前にハワイに移民した日本人たちだって自分と同じように辛いと思っただろう。その場で吐き出したのかな？でも、そのうち、おいしいって感じるようになったのかな？・・・そんな思いが、彼らの頭の中で巡ったのだろうか。もしそうなら、展示という空間の中において、実際に自分で「本物」を味わうことができたからではないだろうか。

「もの」は本来、無味乾燥なものではない。博物館に展示された「もの」が、その機能的配慮から、風合いやおいなどを抜き去られる運命なら、なるべく、それを再現できるよう工夫を凝らすこと、これも博物館教育のありようかもしれない。子どもたちは全感覚で「もの」に触れる。生き生きとした「もの」との出会いは、すんなりと子どもたちの心の中に吸収され、彼らの記憶に長く留まるのではないだろうか。「仕事着」や「ミックスプレート」の他にも、「招き猫」「居間のざぶとん」「弁当箱」「ホレホレ節」など、印象にのこったこと、感じたことをシートに書きとめている。

子どもたちが出会ったのは「もの」だけではなかった。

「展示物を見ているときなどたくさんしゃべった。説明をしてくれた人もハワイをイメージした服装だった」

「ボランティアの人がすごくくわしくおしえてくれたのでとてもよかったです。アラジンさん（民博担当者）もおもしろく、わかりやすいように説明してくれてよかった」

「チヨさん（ボランティア扮する日系一世）の話はおもしろかったし、楽しかったです」

博物館における人との有意義なコミュニケーションは、個々人の見学体験をより豊かなものにする。三島中学校の生徒たちも、博物館のスタッフ、研究者、ボランティア、レストランのシェフなどさまざまな人々と会うことができた。博物館は静かにするところというイメージをもった子どもたちが「たくさんおしゃべり」をして、楽しい博物館体験ができたなら、「今度は家族とみんなよくいこう」と、その体験を広げていくことができるだろう。実際、三島中学校の子どもたちの多くは、夏休みに、個人見学で民博を訪れている。

e. 反省点

先に記したように、三島中学校の意向で、見学日の日程が子どもたちにとって負担の大きいものだったこと、それが彼らの学習に影響したことは、学校側とともに真摯に

見直さなければならない反省点である。今回のプログラムは、学年で取り組むフィールドワークの一環であり、無論、総合的学習としての積極的な姿勢の表れでもある。それが裏目にてしてしまったことは、経験不足のわれわれ博物館側にも事前に読めなかったことだった。確かに、学校主体がわれわれの基本姿勢であったが、子どもたちの学びにとってよりよい環境やスケジュールを学校と十分検討していく姿勢が重要であろう。今回の反省を踏まえて、今後、博学連携を進めていくときに活かしていきたい。

同じ事が、民博での見学の展開についても言える。それは、導入に当初30分かける予定だったが、実際には、その倍も時間をかけてしまったことだ。そのために本来活動の主となる子どもたちの見学の時間が削られてしまった。時間にしろ内容にしろ、過剰な導入は子どもたちの博物館体験全体にとって、むしろマイナスになる。なぜこのような失敗を招いてしまったのか。まず、担当者自身に力が入りすぎていたことを正直に認めなければなるまい。なるべく退屈にならないように、少なくともタイトルの意味は理解してもらいたい、「もの」をよく観察しそこから考えるという姿勢を身につけて欲しい、など担当者が多くのことを子どもたちに期待してしまっていた。また、民博に着いたときの疲弊した子どもたちの様子を見て、予定を変更してでも落ち着く時間のゆとりをもたせるべきところだったのに、逆に、気分を盛り上げなければという焦燥から、悪循環をつくってしまった。この導入に時間をかけすぎてしまったことは、子どもたちの感想文からも確認できる。

今回の学習プログラムは、学校にとっても民博にとっても初めての挑戦であり、鋭意企画されたプロジェクトを成功に導こうとするあまり、近視眼的になり、全体的、客観的態度を失ったまま本来の目的をおきざりにしてしまった。往々にしてある事態とはいえ、今回の反省を厳しく捉え、再び繰り返すことのないよう、次のステップを踏んでいかねばなるまい。学校主体でも博物館主体でもなく、子どもたち自身が学びの主体であることを忘れてはならない。

4) 事後学習

「弁当展」見学後は、三島中学校が全面的に主導し、事後学習が実施された。また、一連のプログラムの学習成果が10月末の学校全体における文化祭で発表された。残念ながら、事後学習の全ての流れを記録することは物理的に不可能であったが、文化祭での発表の様子や担当教師への事後インタビューから、事後学習を総覧したいと思う。発表までの大まかな流れは、

6/7	民博見学
6/20	クラス発表
10/26	文化祭発表

というように、全体が二段階のスケジュール構成になっている。6月7日のフィールドワークの際には、学年全体がクラスをまたいで6コースに別かれ、民博見学も含めて、

大正区の沖縄出身者居住区や福祉施設などを訪問した。そこで得たものを、クラスに持ち帰って班毎に発表するというのが最初のステップ。その後、テーマを併合して、担当を組み合わせ、新しいメンバーで話し合いを重ねながら準備をすすめ、10月末の文化祭で学年として発表するというのが最終的なゴールである。

a. クラス発表

見学2週間後の総合学習の時間、各グループが教室の前でフィールドワークについての報告をしてから、聞き手であるクラスメートに選択式のクイズをおこなった。フィールドワークの報告をよく聞いていれば答えがすぐみつかるよう工夫されていた。次は、その一例である。

カウカウタイムとは何の時間でしょう？

- 1 牛乳をくばる時間
- 2 警察犬の訓練時間
- 3 お弁当の中身を交換する時間
- 4 買い物をする時間

子どもたちの学校での学習発表というと、プレゼンテーションの未熟さも手伝って、どうしても形式的で一方的なものになりがちだが、こうしたインタラクティブなクイズ形式をとることで聞き手の参加性を高めることができる。発表を考える側も、いったい何を自分たちのエッセンスにするか、どう問いをたてたらメッセージが伝わりやすいかなど、発表の内容だけでなく聞き手のことを意識して組み立てなければならない。また、何より、お互いが楽しく問題を共有することができる。そうした三島中学校のねらいはうまく機能したようで、発表では生き生きとした双方向のやり取りが見うけられた。

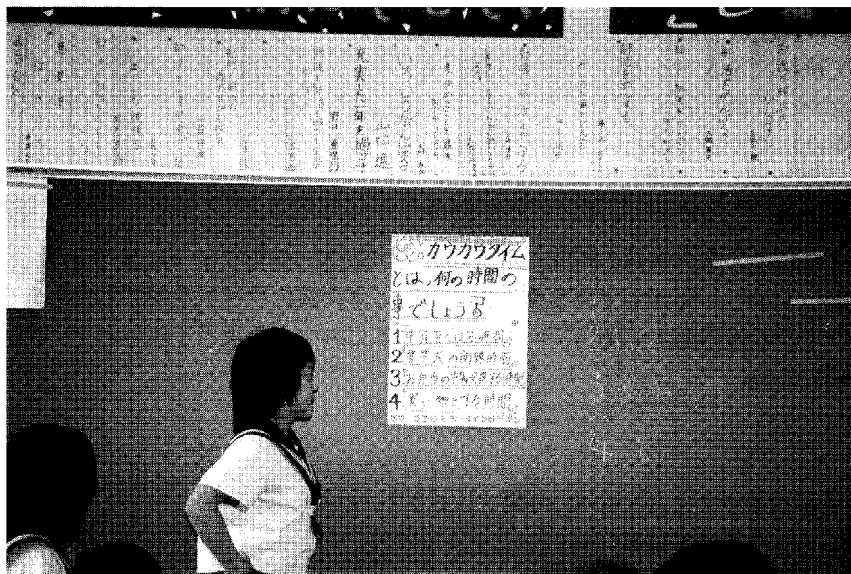


写真12 クラス発表の様子1

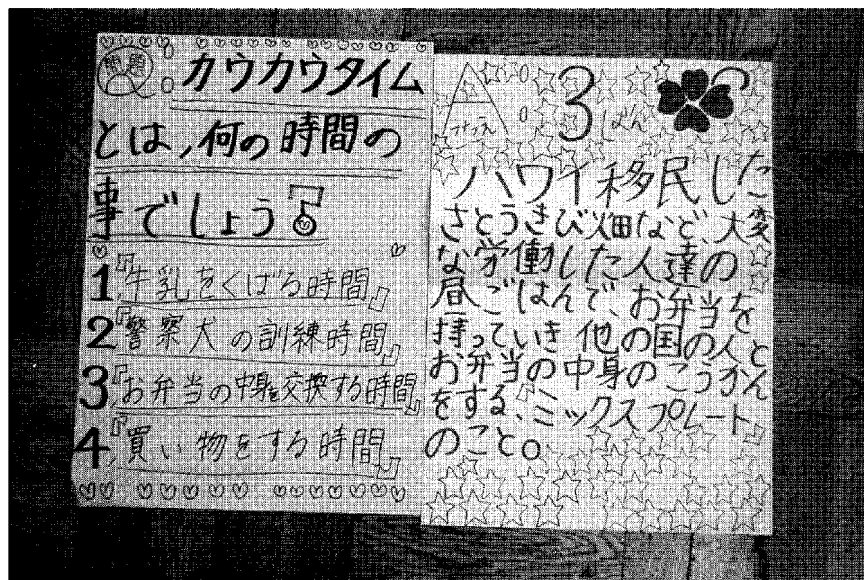


写真13 クラス発表の様子2

b. 文化祭発表

クラス発表の後、さらに掘り下げた事後学習を進める上で、何をテーマの対象にしたいか、再度子どもたち個々人に選択し直させた。その上で、再びグループを組みなおし、新しいメンバーで文化祭発表を準備していくことになった。彼らは、そのテーマを「ミックスプレート」とし、最終の文化祭では、教室での展示と舞台発表をおこなった。

展示教室の入り口に、ハワイで使用されている多種の言語を視覚的にわかりやすく配置し、ハワイが多文化社会であることを示すことで全体への導入にしていた。次に、ハワイの日系移民に関する年表と戦時中の日系アメリカ人の生活の様子を簡単に記述したものを壁面に展示し、その背景を押さえていた。教室中央に並べられた机上には、自分たちで制作した作業帽子をおいて手ぬぐいをどう加工したかを見せたり、「シャカ招き猫」を立体的に再現して一般的な招き猫との違いを提示したり、紙粘土でつくったミックスプレートを並べて、料理ひとつひとつに、表には「めくって」という言葉、裏には料理名を明記したキャプションをおいたり、中学生なりの創意工夫の見られる手作りの展示をおこなっていた。

舞台発表では、実際に何皿かのミックスプレートを調理し、その調理風景をビデオ撮影したものを、解説を交えながら上映した。材料から、その下準備、調理という一連の流れを記録し、出来上がった後は、それぞれどんな料理を作ってミックスプレートにしたのか、どんな工夫をしたのか、ミックスプレートのクローズアップとともに料理人自らが説明をするという内容である。

c. 学校側の取り組みの姿勢

以上のように、事後学習の展開、および発表の内容を垣間見ながら、次のような三島中学校側の基本姿勢がうかがえる。

- ① 事前学習や「弁当展」見学における子どもたち自身の発見に焦点を当て、テーマを設定していること
- ② 子どもたちの能力に応じた展開を大切にしていること
- ③ 「もの」作りを通して、より体験的に学習をすすめていること
- ④ 伝える相手を意識して、メッセージしようとしていること

フィールドワーク後の事後学習の展開として、学校教育でよく取り組まれるのが、いわゆる「調べ学習」である。調べ学習には定義された教育手法があるわけではないのだが、実際によく実践されるのは、フィールドワークで見聞した事柄について、関連書物や写真などの文献を中心とした二次資料を探り、そこから必要なものを抽出し整理して、ノートや壁新聞などにまとめあげていく方法である。実際に、この「弁当展」に関わった他の学校でも、同様の展開をしたところがいくつか見うけられた。ところが、三島中学校の事後学習に特徴的なのは、そうした文献調査という展開ではなく、むしろ仕事着を再現したり、ミックスプレートを作ったり、「もの」を作るという体験的学習をすすめているということである。

学校の担当教師へのインタビューによると、従来の文献を調べる学習方法が、子どもたちの能力を超えてしまうことが往々にしてあり、結果的に学習効果が薄かったという反省を踏まえて、意識的に方向転換を試みたという。フィールドワークにおいて子どもたち自身が興味をもった「もの」に絞り込み、彼ら自身がやりたい方法で発表までの準備をすすめるという姿勢を貫いた。なるべく多くの子どもたちが興味をもって、積極的に参加できることも、この総合学習の重要な鍵である。また、教科学習のように完結型の教育ではなく、子どもたちの自主的な展開を期待するオープン型の教育である。その意味で、現実の子どもたちを正しく見直すことからまず始めた、三島中学校の姿勢は評価されてよいだろう。この事後学習には、総合学習が本格的に導入されたらどの学校も向き合わねばならない課題のはずである。連携をする博物館側も決して無視できるものではない。これは「弁当展」で、実際にいくつかの学校と関わる中で、新たに浮き上がってきた重要な問題であった。

(吉荒佳枝)

3. 課外活動における学習プログラムの取り組み

一和歌山県国際教育セミナーを事例に

1) セミナー概要

本セミナーを主催したのは、国際理解に興味を寄せている和歌山県内の高校教師の自主的な研究会「和歌山県国際教育研究会」である。引率教員の興味関心や内容に対する理解が深かったことが、博学連携を効果的にすすめる背景となった。本研究会は、和歌山県内の中・高校の教員を中心とした自主的サークルで、国際交流などさまざまな活動を通して、生徒の国際理解の促進をめざしている。今回は「弁当展」が民博で開催されるのを機に、その見学を通じたセミナーをおこなった。そこには戦前から多くの移民を送りだした身近な地域（和歌山県）について考えさせたいという教師の意図があった。教師との事前の説明会やメールなどによるやり取りをおこない、日系移民の歴史的経験を多文化社会ハワイについて理解することを通して、身近な多文化共生について考えることをねらいとすることを共通に理解して、当日の実践となった。本実践では、学習支援をするわれわれと研究会が「移民の問題は遠い外国の問題ではなく、わたしたちの問題であり、身近な多文化共生を考える大切な要素である」という理解が一致していたことから、当日の博物館見学や学習支援がスムーズできた。

当日は交換留学生として来日している外国人高校生4名とALT (Assistant Language Teacher) 3名の参加があり、高校生どうし国や文化を越えてディスカッションする場面が見られたり、午後の講義の最後には日系4世の話も聞くことができた。多文化共生を最終的に考える本セミナーとしては、人的な環境も整っていたと言える。

当日の内容は以下の通りであった。

研修(A) 10:50~12:45 担当: 森茂岳雄・吉荒佳枝

内容:

- ① 展示の導入 10分
多文化社会に生きるということ
- ② 展示でできる活動についての説明 15分
製作活動(新聞、ミニブック、など)・アクティビティ
- ③ 展示見学・活動 60分
- ④ 各人の希望に応じて上記の活動を実施
- ⑤ ふりかえり 15分
- ⑥ 小グループでの感想の話し合い

研修(B) 14:00~15:20 担当: 中山京子

内容:

- ① 和歌山県からの移民の歴史を知る 20分
 - ・アメリカ村(三尾村の歴史と日系カナダ人)の歴史 <後掲資料1>
 - ・戦時中の日系人
 - ・和歌山県地図
 - ・アメリカ村資料館・美浜町国際交流会制作
ビデオ「アメリカ村の歴史とカナダ移民」より
 - ・プリント資料
- ② 多文化社会に生きた日系人の生き方に学ぶ 25分
 - ・二人の和歌山出身の日系移民の生きざまを通して、
日系人の歴史的経験を共感的に理解する。
 - ・田口光之助(和歌山出身漁師) <後掲資料2, 3>
 - ・ヘンリー杉本(和歌山出身画家) <後掲資料4>
 - ・日系アメリカ人からのメッセージビデオ
(メアリー・ツカモト/フランク・イリタコ)
- ③ ミニレポート作成 15分
- ④ 来日滞在中のハワイ日系4世(高校ALT)の話聞く

2) セミナーの実際

a. 展示見学 研修(A)

研修(A)は、展示会場にて生徒の出身地である和歌山県とその移民の歴史について、森茂岳雄教授による簡単な説明から始められた。森茂は「日系移民」「多文化社会」「弁当からミックスプレートへ」の3つのキーワードを示し、生徒が展示を見る上での視点を提示した。引き続き、吉荒により展示モジュールの簡単な説明とアクティビティについての説明があった。

展示の自由見学を始めた生徒はそれぞれの興味に応じて、各モジュールを見てまわった。引率教員としてハワイ出身の日系四世である ALT が参加しており、彼女の説明や体験談を聞きながら展示を見学することにより、生徒がより展示を身近に感じることができた。

また、交換留学生としてきている海外からの高校生も、自分の日本での経験と重ねながら見学している姿がみられた。アクティビティへの取り組みとしては、いくつか用意した活動の中で、農作業着を着る活動（女子生徒5人と女性教員1人）、ワークシートを使って多文化社会ハワイの言葉研究の活動（男子生徒2名、女子生徒2名）、紙芝居を読み聞く活動への参加があった。特に短く編集した紙芝居「弁当からミックスプレートへ」への取り組みが積極的におこなわれ、展示を解釈するのに効果的であった。

最後にさまざまな学校から集まった生徒と引率教員をグループに分け、展示から学んだことについてのディスカッションの場を設定した。初対面の間人関係であることから引率教員のリードによって話し合いが進められたが、「日系人は日本人以上に日本的な文化を意識してきたことに驚いた」「日系人がどんな経験をしてきたか初めて知った」「戦争のことをこういった見方をしたことがなかった」「ハワイのプランテーションでどのように違う国の人たちがコミュニケーションをとったのか」「日系人のスポーツ選手がおもしろかった」といった意見が出された。ぎこちなく話し合いが始まったがいくつかの意見がでて、それらを聞きあう中で、「教えられる」「与えられる」学習ではなく、展示を見た自分たちの発見そのものが学びとなることを生徒も実感する場になった。博物館展示と関わる学習環境（場の設定、活動の設定など）をどう構成するか、博学連携における重要な点である。



写真14 研修Aの様子



写真15 ディスカッションの様子

b. 授業 研修(B)

研修(B)は、午前中の展示見学におけるかれらの発見を発展的に補足することと、それを自分たちが暮らす「和歌山県」に引きつけて地域の視点から掘り下げることを目的にした授業をおこなった。研修(A)で活動を十分におこなっていることから、講議を中心とする構成とした。

まず、和歌山県からの移民の歴史を知るために、アメリカ村資料館・美浜町国際交流会制作のビデオ「アメリカ村の歴史とカナダ移民」やプリント資料（後掲資料参照）を用いて和歌山県日の岬にあるアメリカ村についての概説をおこなった。そして、二人の和歌山出身の日系移民の生きざまを通して日系人の歴史的経験を共感的に理解することを目的にし、田口光之助（和歌山出身漁師）・ヘンリー杉本（和歌山出身画家）を教材化した。（後掲資料参照）日系二世の日系アメリカ人から日本人の子供たちへのメッセージ・ビデオを見て、「戦争中は辛い思いもずいぶんしたけれど、今はアメリカ人としていろいろな人に親切にもらって幸せです。日本の皆さんも、いろいろな人と仲良くして（後略）」とのメッセージに聞き入っていた。

3) 参加者の学び

本セミナーを評価するひとつの手だてとして、参加者が記述したものを丁寧に読みとり、評価すると同時に、今後の連携事業の参考とする。

a. 引率者の感想

以下に引率者から寄せられた感想を紹介する。(下線筆者)

- 「ミックスランチ」の見学と午後の講義は大変有意義でした。国際研としての本日の会の進み方としては、時間的な制約が大きく、見聞した内容について、生徒たちが意見交流をする時間が十分になかったことが残念です。学校のある地域にこのような博物館があり、日常の中で事前事後の活動をつないで見学できれば大変効果的だと思います。
(県立田辺商業高校 教師)
- 和歌山県からの移民総数全国第6位！100年以上前から海外へ！！これ程の外国との関係を持っていながら、自分自身「移民の歴史的経験」を学習していないことを痛感した。わざわざ知らないと、知らされていないということは一種のカルチャーショックです。考えてみれば、学校の教育現場で和歌山からの移民のことを詳しく扱ったことはなく、また自分が学生(小・中・高)の頃に先生から教わった経験がない。これらの歴史的な財産をもっと伝える資料や場を活用すべきだと感じました。国際交流と称して外にばかり目を向けていると「外食」ばかりしてミックスプレートの大切さを忘れてしまうことになりそうです。
- 今回午前中の研修のように「自分で見つけ自分で選び体験して学ぶ」という方法はある意味で「指示」ばかりしてしまう自分たちには考えるべき指標を与えてもらった気持ちです。(高校教師)
- このような機会を日頃なかなかもてないのでよかったですと思います。現在、日本の生徒は視野を広く持ち、さまざまなことについて考え、自分の感想や意見を発表することが苦手です。この機会にいろいろ考えたと思うので、質問や意見、また討論する時間があればさらに充実したものになったのではないのでしょうか。Nationality や identity についてももっと深められ、現在、どのようにとらえ、どのように関わっていったらいいのか、にも少し触れられたらよかったです。(高校教師)
- 今回の国際教育セミナーに参加をして、中学生・高校生たちが自分たちが日本人、そして和歌山県人であることのアイデンティティを再認識(確認)したのでは、と感じました。特に午前中のハワイ移民の展示等からは、ハワイへ移った日系一世の人たちが二世の若者たちに日本の伝統に基づいた価値観である、親孝行、目上への敬意、家族関係の調和、互助の精神や忠誠心、責任感などを伝えることを大切に受け継いで欲しかったという願いは、参加したメンバーの皆の心に残ったと思います。また、午後のカナダ移民については、和歌山県人の苦勞を知るとともに、多くの和歌山県人が活躍したことを誇りに感じたのではないかと思います。このような機会を増やし、国際理解に関する分野や将来への夢や希望を持たせていくすばらしい企画であったと感じました。(教育委員会指導主事)
- 数年前、国際理解教育に興味を持ち、授業でも取り組んできました。地域の文化と歴史の中から国際理解に取り組む必要を感じています。紹介のあったアメリカ村のことは知っていましたが、教材として生徒に提示したことはありませんでした。生き生きとして生徒たちに移民の生き方を伝えるのは難しいと思い、敬遠していたかのもかもしれません。和歌山の移民史では、オーストラリアのアラフラ海の真珠とりも有名です。陸地は

白蒙主義で入国できませんから、船で暮らしたそうです。死んで初めて入国で墓石があるそうです。生徒たちと活動するとき、五感に訴える必要性を痛切に感じています。手にとるもの「ハナハナ」のための衣装などもう少し具体的にその必要性を、サトウキビ畑の労働の厳しさとあわせて説明するのもよいのでしょうか。「アクティビティ」の時間を今回もう少しとればよかったですね。(教育研修センター主事)

上記の記述から、このセミナーが教員集団にとっても意義があったことが読み取れる。記述の一文一文の語句にその具体的な意義が記されているが、全体的にみると、博学連携の効果、移民についての教材化の意義、学習スタイルの見直しの3点について、引率教員が着目していることがわかる。基本的には児童生徒を対象とした学習プログラムであるが、こうして教員集団に対して新たな可能性を示すことは学習プログラム実施の重要な役割のひとつである。

b. 生徒の感想

- 今日、「弁当からミックスプレートへ」という国際教育セミナーに参加してひとつの単語が頭に残りました。それは「文化」です。もとはみんな同じ日本人なのに移住してハワイなどの文化や日本の文化、中国、韓国そして世界中の移民者の文化をミックスプレートのようにまぜて完成したのが、各国移住者の共通文化ではないかなと思います。美浜町のアメリカ村から何人も、そして和歌山県民、日本各地から日本国民が移住したことは今までは知らず、今日展示品を見て「いろいろな苦勞、努力をしてまですごく大変だったろうし、すごくすごい人々だ」と一言思いました。そして今日、ハワイの1990年代初期から後期まで現地人のくらし、文化、使用品などが展示され、話をしていたりして、今まで知らなかったことをたくさん学べたような気がしました。(中学校3年 男子)
- 戦時中の差別問題は小学校から学習してきたが、日本人、日系人に関する問題というのはほとんど聞かなかったから、実際のところを本当に身近な問題としてとらえたことはなかった。しかし今日、三尾村の話と「弁当からミックスプレートへ」の展示を見て、大きく印象に残ったことがある。ひとつは和歌山県から外国への移民が非常に多いことだ。移民について考えたことはほとんどなかったわけだが、これには驚いた。二つ目は太平洋戦争中の日系人への差別があったことだ。こんな身近に考えるべき問題があり、興味がでた。確かに日系人の立場というのは戦争のように混乱している状況では、非常に弱いものとなっていただろう。『スマレの戦争』の一部を読み、同じ日系人の間でさえも「自分はアメリカ人だ」「自分は日本人だ」と言って争いが起こっていたことに何ともいえない悲しい気持ちを感じた。私が「日系人」という言葉を正確に知ったのは、実は今日が初めてである。ごくたまにテレビや新聞に取り上げているのをちらっと見たことはあるが、実際にどういうものかというのは知らなかった。今日あるハワイ、カナダの笑顔。あの笑顔の裏には、大変深い移民者たちの歴史があるということを知ることができ、非常に意義ある時間を過ごせたことを嬉しく思っている。最後に「弁当からミックスプレートへ」で感じたことだが、ああいうふうに多文化の人々が「食」を通じて交流することができ、それが独自の文化として根づいているのがとても興味をひいた。

それぞれの文化を尊重することも大事だが、それぞれの文化を合成してまた違ったひとつの文化を創るのもおもしろそうだと思った。(高校3年 男子)

- 事前に先生からもらった資料(日系アメリカ人について)を読んだけど、ミックスプレートの意味が分からなかった。勝手に給食のことかと思いこんでいた。移民の人のつくった歌のようなものを読んだ。すごく短い文だったが、ハワイに対する強いあこがれがあったこと、そして現実にはハワイに来てみての生活のつらさが感じられた。それでも弱音は吐かないぞと自分に言っているかのようだった。アメリカ村があるのは知っていたが、こんなにも多くの人に移住していたとは。ハワイの方が日系アメリカ人に対し、待遇がよかったような感じがしたけど「真珠湾攻撃」によりさまざまな苦勞をしたことを知った。田辺にもフィリピン人が多く見られるほど、外国人労働者が増えている。私たちが直面しているひとつの問題である。外国人労働者は安い賃金でやとえるので、これからさらに就職難がひどくなるだろう。私は大学で経済学部に行って、経済史、さらにこれからのこういう問題をどう対処するかを学ぶつもりである。(高校3年 女子)
- 今日日本人が海外旅行で行くような華やかな「ハワイ」のイメージはなく、全然反対の「苦勞」とか「差別」というような言葉が似合う「ハワイ」でした。最初の展示物のところの方は冷蔵庫やテレビ、トロフィーなどもあったりして、裕福な日本人というのが見て分かったけれど、中頃には、戦争の道具とかガスマスクなんかもあって怖かったです。そして、黒人差別問題にも直面していて、ハワイの人は差別とかしなくて、わたしはこんな人たちみたいになりたいと思いました。私は肌の色とかで差別したりするのがなぜできたのか本当に不思議に思います。一体誰がそんなことを思いついたんでしょうか。今日はこういうことを学べてよかったです。(高校3年 女子)
- 今日、この「弁当からミックスプレートへ」という展示を見たり、説明を聞いたりして、日系アメリカ人の方々のことを初めて詳しく知りました。中でも和歌山からたくさんの方が移民しているのに驚きました。そして、その人たちが戦争中もアメリカ軍、連合軍として日本と戦うときは本当にどんなきもちだったのだろう。たとえ直接戦うことはなかったとしても、複雑な心境だったのではないのかな。また、収容所へ3年間も閉じこめられて生活した様子を聞くと、敵軍と同じ日本人の姿をしているというだけなのにすごい差別だと思います。日本の伝統を大切にする日系アメリカ人の人たちは、今日日本にいる私たちより日本のことをよく知っているかもしれない。もしかしたら日系アメリカ人こそが一番日本人らしいかもしれない。(高校3年 女子)
- 僕は今まで和歌山県からの移民がこんなに多いものだとは知らなかった。生活が苦しくなってよりよい地を求めて行く、むろん和歌山でもそういうことはあったとは思っていたけど、村全体でなんて大規模なことは知らなかった。日本を捨てて、海外へ移住、そうして国籍まで変えた人々が戦時中、敵性外国人という理由だけで差別を受ける、その人たちの苦悩は計り知れなかったと思う。祖国日本と今の国アメリカが戦争をし、どちらからも敵視されてしまう。戦後、アメリカの一国民として権利を認められたときは嬉しかっただろうなあと思った。僕はハワイという島はすばらしいと思う。いろんな国から来たいろんな文化が混ざりあたらしい文化を創り出しているなのでこの島の意識があればもっと国際協力がかんたんなものになっていくとも思った。(高校3年 男子)
- I think that America has a great influence in Hawai'i as well as in Japan. Before

America and Japan had a big influence in Hawai'i they create a new culture and it was hard for Japanese people that were making a new life in Hawai'i to construct a new culture had then Japan bombed Pearl Harbor creating a reaction of hate toward Japanese people. As the lady in the video said when she was a child although she was an American citizen people didn't like her or people like her. Bombing Pearl Harbor make life difficult for Japanese American people. Now I think Japan has a great influence over Hawai'i as costumes and culture but USA also has a big influence over Japan as you can see in fashion and the style of life of Japanese people has change. I think Japanese American citizens are sometimes discriminated but they have got to overcome those things and have create a new way and a unique way of live.
(高校3年 イボン アルファロ、コスタリカ出身)

これらの生徒が書いたレポートを読むと、彼らが実に豊かに展示や話から学んでいることがわかる。同じ展示や話から生徒がそれぞれの視点で学びを深めている。「文化」に注目した生徒もいれば、「生きざま」に学んでいる生徒もいる。中には「差別」や「権利」によせて考えを述べている生徒もいる。この幅広い学びが成立する背景には、自由に展示と対話する時間と環境を保障すること、彼らのそこでの気づきを発展させるための授業を展開したことがあろう。このことから、効果的に博物館展示から学ぶためには、見学のみにおわらず、カリキュラム化された構想の中で展示の見学を位置づけることの必要性が言えよう。

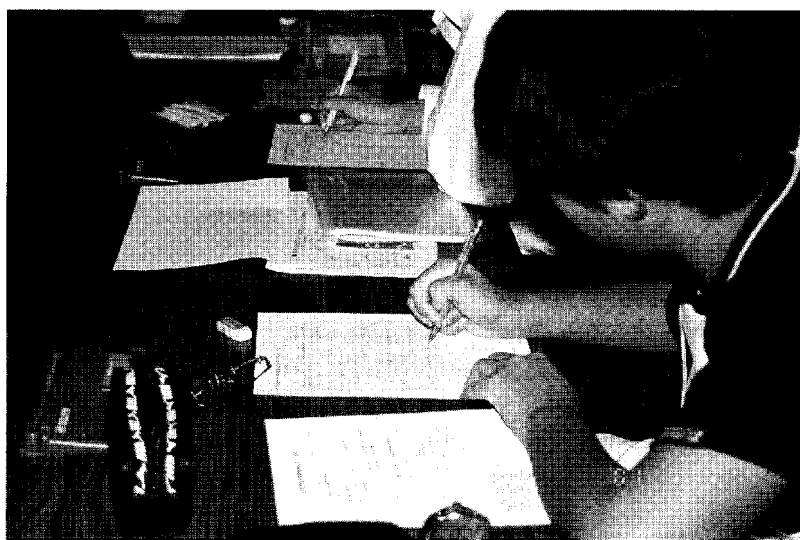


写真16 研修Bの様子 ミニレポートを書く高校生

おわりに

博学連携を考えると、一般的にはカリキュラムに位置づけて構想・計画することが求められる。しかし、本実践のようにカリキュラム外においても、その取り組み次第では博物館と教育を結んで児童生徒に学びを提供できる。本実践では、和歌山県国際教育研究会に所属する教員とその学校で興味ある生徒やクラブが参加し、日系移民についての理解を深めると同時に、地元和歌山から国際化について考える機会を提供することができた。博学連携をすすめていくために、本実践のように可能な範囲、段階から始め、相互理解を深めていくことが重要である。

(中山京子・森茂岳雄)

4. 学習プログラムの実践から得られたもの

全学習プログラムを終えた時点で、協力を得た六つの学校団体の担当教師に対しインタビューをおこなった。全体的には、「大変よかった」「よかった」という高い評価をいただいたが、その評価の理由としてあげられた言葉を集約したのが次の二点である。

- (1) 「もの」に触れるという体験的な学習ができた
- (2) 「もの」も大事だが、一番大事なのはそこで人に出会うこと

博物館とは、「ものが並んでいるだけのところ」とか「静かに鑑賞するところ」といった、来館者にとって閉じられた空間、受動的に知識情報を享受する装置というイメージがいまだ根強く、そのことが積極的な利用への期待を阻んできたと思われる。しかし、学習プログラムの実践を通して、上記のような評価を得たことは、学校側にとっても、今後の博物館利用を考える上での大きなターニングポイントになったことを意味する。学校や学びの主体である子どもたち自身が「博物館」という場に対して、新たなイメージと可能性を実感できたことが観察やインタビューからうかがえた。博学連携に対する将来的な展望として、条件が許す限り、今後も取り組んでいきたいという積極的な意見も多く聞かれた。無論、さまざまな問題点や課題に対し、前向きに善処していく姿勢が問われるだろうが、ともかくも、まずは、この「弁当展」学習プログラムを通して、民博としての博学連携の確かな第一歩を築けたと言えるのではないだろうか。

この節では、上の二つの言葉をキーワードにして、実際の子どもたちの反応や感想文、教師に対するインタビューから、「弁当展」学習プログラム全体を通してわれわれが得ることができたものを振り返り、博学連携の将来的可能性について考察してみたい。

それに先だち、教師向けインタビューの内容や方法について、簡単にふれておこう。インタビューの企画実施に際しては、全米日系人博物館の三木美裕教育部長、博物館研究所の橋本知子氏および学習プログラムの民博担当者である吉荒佳枝の三者で内容や方法等を検討した上、学校を訪問し、橋本氏が聞き手となって実施した。また、遠方の場

合は、同内容をアンケートの形式に切り替えた。橋本氏に第三者の立場で関わってもらったのは、当然ながら調査の中立性、妥当性を確保したいという配慮からである。

インタビューの内容は、大きく分類すると次の三つの事項になる。

- ① 学習プログラム全体について
- ② 「弁当からミックスプレートへ」展のテーマと学習プログラムについて
- ③ 博学連携による学習プログラムの推進について—今後の取り組みへの要望

質問項目、および、個々の意見については、この章の最後に資料として添付するので参照いただきたい。

1) 「もの」に触れる

今日、新しい博物館がめざすべき姿として、体験型、参加型という言葉が盛んに聞かれるようになった。これらの言葉は往々にして、ただ単に「触らせればよい」「遊ばせればよい」という、軽い認識しかもたらさない危険がある。しかし、子どもたちに有意義な学習や豊かな博物館体験を提供するには、客観的な観察に基づく十分な考察と柔軟な姿勢が必要なことは言うまでもあるまい。ここでは理念を語ることは避け、「弁当展」学習プログラムの実践を振り返ることに焦点を当て、博物館で「ものに触れる」ことの重要性や今日的課題を探ってみたい。

a. 学校教育における言語教授の限界

博物館で「もの」に触れるという体験は、学校教育の中でどのような意味をもつのだろうか。教師に対する事後インタビューから、現在の子どもの実態や学校現場が抱えているさまざまな問題に気づかされた。

「今の子どもたちは、自分から主体的に、ものごとに出会っていくことが少ない。テレビやインターネットなど、一方的に流れてくる情報をただ受け取るだけで、満足してしまう」

「調べたいことが自分の中であって、調べ始めるべきなのに、調べること自体が目的になっている。そのうち何を調べているのかわからなくなる。肝心なのは、自分の中に調べたいことがあるかどうか」

「今の子どもたちは、文字を読んで、そこからイメージを膨らますことが難しくなっている」

「調べようとする、みんなインターネットや本という手段を使う。人に聞くということをしない。人との関係性作りが苦手になっている」

子どもたちの自主的な学びを支援すること—これは、いうまでもなく、近代教育の歴史を通して重視された基本理念であるが、今の子どもたちの実態にかんがみて、昨今

ますます重要視されるようになってきた。また、来年度から本格的に導入される「総合的な学習の時間」の根幹にも通じることである。従来、学校は、教科書を中心的教材として言葉による知識情報を享受する場であった。そこでの、いわゆる「調べ学習」では、子どもたちは図書館の文献資料をあたったり、インターネットで検索したりという活動を通して学習をすすめる。しかし、上に記した教師の言葉が示唆するように、言葉だけによる知識の教授は、残念ながら、子どもたちの深い理解を導く有効な手段とはいえないようだ。「ある博物館の体験コーナーで、道具を実際に使わせてもらうことができた。子どもたちは、それを手にとり実際に動かすことで、その仕組みに関心や疑問を抱いた。そうした体験を通して、答えを自分で見つけることができると、大変納得がいったようだった」と、ある教師が語るように、子どもたちが、体験から学ぶことは非常に大きい。まず、自分の手を動かす。そこから、彼らのものごとへの主体的な働きかけが始まる。そのように主体的に出会ったことは、彼らの実感をともなった経験となり、新たな展開へと広がっていく。それは、「もの」の充実した博物館だからこそ期待されることかもしれない。

b. 「弁当展」での「もの」との触れ合い

今回の「弁当展」では、さまざまな体験型の教育キットを用意した。また、事前学習や見学時の導入においても、実物に触れさせる、芝居形式をとり入れる、アクティビティー・シートを利用する、ミックスプレートを試食させるなど、子どもたちが主体的に展示に触れることができるよう配慮した。彼らがどのように「もの」に出会ったか、感想文での発言や、写真などから見学における子どもたちの様子を見てみよう。

「私はハナハナという作業着を着てみると、だんだん頭の方からあつくなってきたので、ぬごうかなーと思ったけど、脱ぎたくなかった・・・私は、ハナハナが一番心に残っていて、家に持ってかえりたいなと思いました。また、着たいです」(小6女子)

「ミックスプレートの本物を食べさせてもらえた。ひとり二個だった。ぼくはソーセージを食べた。すごく辛かった。同じ種類に見えて、日本と違うことがわかりました」(小5男子)

「ハワイの猫の・・・特徴は、くつがぞうり、しろにぶちもよう、首にすず、そしてサングラスまでかけている。おまけに手は(絵:シャカのポーズ)だし、ハワイでは手のあいさつがあります。手の形はこう。このポーズはアメリカンダイレクトだと思っていましたが、じつはあいさつだったんです。でも、いっちょまえに猫までやってるなんて、ハワイはゆかいでいいなあ」(小6女子―導入で、「シャカ招き猫」の特徴に気づかせ、猫と同じシャカのポーズをとらせた子どもからの感想)

「ものに触れる」とはいうものの、それは単なる物理的な触れ合いを意味するのではない。大切なのは、むしろ、「もの」に対して主体的な関わりをもつことである。子どもたちが、主体的に関わり、そこで気がついたことは、わかったという実感を伴った、彼ら自身の貴重な経験になる。その確かさをもって、子どもたち自らが、学びの姿勢そ

のものを獲得する。上に列記したさまざまな例からわかるように、「もの」に自主的に接することができた子どもたちは、ひとつの「もの」を他と切り離して、断片的に見ているわけではない。ある「もの」を隣におかれた「もの」と見比べてみる、自分の知っていることと重ね合わせる、そうすることで、「もの」の背景にあるメッセージに気がつく。そこから、自分なりに問題をたてたり、考えたりすることができる。

博物館は、学校という環境には不足した「ものと触れ合う」体験を提供できる場だ。「最近の子どもたちは、『イメージする』ということが不得手になってきている。そういう点でイメージすることを助ける実物というものがとても必要になってくる」と、ある教師が語るように、「もの」の宝庫である博物館は、今後ますます、教育の場としての役割を期待されるだろう。子どもたちの「もの」との主体的な関わりが、彼らの学びにどれほど重要かを常に認識しつつ、学びの主体である子どもたちの視点を大切に、個々の学校と博物館がその可能性をひきだすべく連携していかなければならないだろう。



写真17 弁当箱を観察する1



写真18 弁当箱を観察する2

2) そこで人に出会うこと

a. 北山田小学校の目的

今回、参加した多くの学校団体が、このプログラムに対し、「多文化共生」という目的を掲げる中で、吹田市立北山田小学校は、観点の違う目的を提示していた。彼らの一年を通しての総合学習のテーマは「食べることを通して人とつながろう」ということであつた。その流れの中で、「弁当展」の学習プログラムを採用した背景には、教師側の行き詰まりがあつたという。授業案には「それまでの調べ学習がインターネットと本に偏りがちになってきたこと、目標のひとつである人とのつながりが希薄になってきたこと、また折よく食べるにつながる展示が民博でおこなわれており、(中略)この学習を通して、関係施設を利用することの良さや背景にあるものの把握、調べ学習や発表会を通してのコミュニケーション能力を育てていきたい」と書かれている。この「弁当展」学習プログラムは、単に食に関する学習の一環としての博物館見学ではなく、そこで博物館のスタッフやボランティアに出会い、人とのコミュニケーションを通して学習を深めることのできるよい機会になる、と判断されたわけだ。

学校側が用意した学習プログラムのための「自己評価」というレポートには、「弁当展」の見学や、その後の調べ学習を通して、どんな人とつながったかを記入する欄が設けてある。そこから、いくつか抜粋したい。

〈だれと?〉…… その人について、どう思いましたか?
 〈番号札をつけた人(農場で選別の為に札をつけさせられた労働者)〉……
 かわいそう3059とか番号で呼ばれるのはいや
 〈日系人の人々〉…… 日系人の人々は苦勞しているんだと思った
 〈ボランティアとアラジン(民博担当者)〉……
 ハワイのことをたくさん知っててすごいと思った
 〈民博のきょうじゅ〉……
 さすが、きょうじゅ。てんぷらはポルトガルごととおしえてくれた

「だれと出会ったか」という問いに対して、展示や文献から、遠いハワイの移民に出会うことができたことをあげる子もいれば、見学した際に、実際に触れ合った博物館の人とのことをあげる子もいる。「番号札」に関心を示した子などは、「番号札」自体地味な展示だったのに、それに、気がつくことができたのは、博物館の人が声をかけてくれたからだろうと、教師は振り返る。彼らは、その後の調べ学習で、テーマを他に広げることなく、初めに感じた「ひっかかり」だけを注目して、自分なりの事後学習をすすめ、充実した発表をおこなっていた。初めの声かけが、彼らの興味をひきつけ、結果的にそこまでひっばることができたのかもしれない。この、北山田小学校の担当教師は、学習プログラム全体を振り返って「人とつながる」という今回の学習目標は「達成された」と、事後のインタビューで語っている。

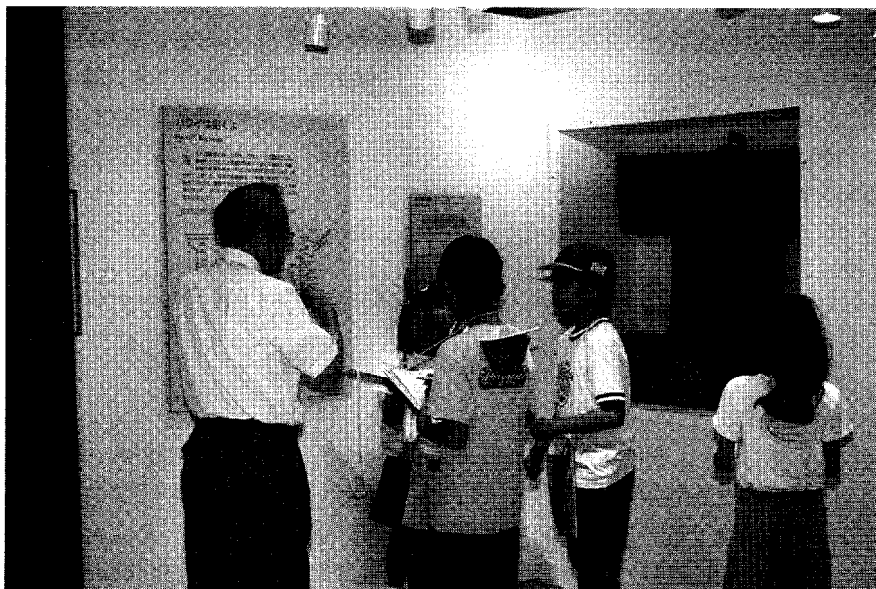


写真19 民博の教官に質問をする



写真20 展示場でフリーディスカッション

b. 事後学習の支援

この学習プログラムでは、事前学習や見学だけでなく、見学後の取り組みにおいても、さまざまな形で博物館と学校の交流がみられた。先の北山田小学校では、調べ学習の途中段階において、博物館側担当者が学校を訪問し、子どもたちの活動を支援した。また、遠方の学校は、子どもたちが壁にぶつかると電話やファックスで博物館に直接問い合わせ、民博側もそれに対し適宜アドバイスを与えた。

「しらべてもなかった。しゅるいとかもよしあらさんにおしえてもらった。それでやっとわかった。うれしかった」

「(民博の人は) いそがしいのに、わたしたちのためにさがしてくれてありがたいとおもいました」

c. 子どもたちの発表

6回の事例のうち、4校が具体的な事後学習を展開し、それぞれの形態で発表をおこなった。三島中学校の展開については、前の節で、また、同志社中学校でのユニークな発表については、第1章の三木氏との対談の中で詳しく述べたので、そちらを参照いただきたい。他校の学校発表についても、民博の担当者やボランティア・スタッフが、学校を訪問し、発表を見学するなどの交流に心がけた。それぞれの発表に利用してもらうために、ハワイのスーパーマーケットの食品パッケージ、試着用のハナハナウエア、キット用の日系一世のお弁当箱が、学校に貸し出され、子どもたちの発表の援助をした。

学校と博物館の連携が、見学だけで終わってしまうのではなく、その後も人や「もの」の行き交いが継続し、子どもたち自身の発表までつながった。「学園祭での発表にも、博物館の人が来てくれるということが、子どもたちの（発表準備に向けての）やり甲斐になっていた」と、ある教師が言うように、そうした長いスパンでの関係性づくりが、子どもたちにとってさらに有意義な経験に結びついたようだ。この学習プログラムが、一人ひとりの子どもたちに博物館を身近なものに感じさせる助けになったことは喜ばしいことだ。「弁当展」にとどまらず、彼らが、今後、積極的に博物館という施設を利用していくことに期待したい。

「学校の子どもたち 3 人ぐらいが、モジュール 2 のリビングのソファでくつろいでいるんですよ。そのうちのひとりが、『ぼくは、本当はハワイに住んどったんや』という、明らかに冗談なんだけど、他の子どもたちがそれを真に受けて、そこで話がはずむわけ。あのリビングでね。ぼくは、この子どもたち面白いなって、思った。それで、声をかけてみたら、この「弁当展」を文化祭で発表するという、だから、あ、見たいなって思って、遊びに行くよって約束したんです。あの文化祭、よかったですよ？ぼくはね、とてもうれしかった。あの「弁当展」を見学して、それでおしまいではなくて、こういうふう展開をしてくれたことが、自分たちのものにしてくれたことが」

—発表を見学したボランティアさんの声

「もの」を収集・保管し、展示し、調査研究をすることが、博物館のかつての使命であったが、変動する社会に応じ、教育の場としての役割に焦点があたるようになったことは、この報告書を通して、再三述べられてきたことと思う。教育は、人が人に対してする行為に相違ない。博物館を教育の場として捉えていくならば、鍵になるのは人であるというのは当然のことである。

「展示内容というより、展示と子どもたちをつなぐ人がいるということが大きかった」

「中学校教諭だけではうまく説明できない内容を事前学習や、実物を使った説明、プレートの再現などでわかりやすく説明していただき、学習の深まりがあった」

「見学に行ったら、博物館の人が迎えてくれ、導入をして、自由見学の後子どもたちの感想を聞いてくれたことが、とてもよかった。だから、二回も見学にいらしたということになった」

以上が代表するように、この学習プログラムに関わった多くの教師や子どもたちから、博物館を身近なものとして捉え直すことができたという意見がたくさん寄せられた。「弁当展」の学習プログラムは、全米日系人博物館の博物館教育をとり入れ、ともに活動することで、そのノウハウを学んでいくことを第一義としていた。確かに、あるべき姿勢や具体的な実践方法などを習得し、貴重な実績をつくることができた。同時に、そうした実践を通して、新たなつながりを結ぶことができたことも、民博の大きな糧にな

った。そのことをいま一度認識して、個々のつながりをより確かなものにしつつ、国立の機関として裾野を広めていく姿勢が問われるだろう。「そこで人に出会うこと」—このことは、子どもたちがその成長過程において、どこでも見いだしうる体験に相違ない。では、博物館ならどんな人のつながりが期待されるのだろうか。どんな出会いを提供すれば、一人ひとりの子どもたちに豊かな博物館体験を約束できるのか。民博としてのメッセージを大切にしながら、子どもたちの視点を正しく捉え、長い視野をもって探っていかなければならない。

3) テーマと事後学習

a. 小学校と中等高等学校

この「弁当展」学習プログラムについて参加校を募ったとき、なかなか受け入れてもらえなかった理由のひとつが、「ハワイの日系移民」というテーマそのものにあったことは、先に触れたとおりである。実際に、プログラムを展開して、子どもたちにとって、このテーマはどうだったのだろうか。

事後の教師へのインタビューや子どもたちの感想をみてみよう。

< 教師へのインタビュー >

- ① 中等高等学校の子どもたちには見合ったテーマだったが、小学生には難しかった
- ② 全部を理解したとはいわないが、自分が発表をするところは理解していた(中2)
- ③ 日本人がハワイに移住したという事実や、辛い目にあったということは、理解したようだ(小5・小6)
- ④ 興味をもった部分については、ある程度理解したが、言葉が難解で整理しきれていない(小6)
- ⑤ 子ども向けの資料が少なく困っているようだった。(小5・小6)
- ⑥ (調べ学習を)一生懸命やっても、難しい言葉に出くわし、何を調べているかさえわからなくなったりした(小6)

< 一連の事後学習を終えた子どもの感想 > (克明小学校6年)

- ① 調べるのが難しかったけど、やりとげれてよかった
- ② 吉荒さんにFAXで問い合わせました。いっしょうけんめいやったからよくできたと思います。これほど、大変な調べ学習をしたのは、たぶん、はじめてだと思
- ③ 今回の調べ学習は、おくが深くて、いい勉強になりました
- ④ 今回の調べ学習は、すごくしんどかったと思う。終わってからものすごく長かったなあと感じた
- ⑤ 調べ学習がすごく楽しくて、おもしろい調べ学習になりました

上記の声から明らかなように、小学生にはやはりかなり難解なテーマであったようだ。周知のように、子どもたちは自分の身近なところから経験や知識を広げていく。当

然、学校側も、その基本にのっとなって学年に応じたカリキュラムを展開している。小学6年生になって歴史を学習しはじめたとはいえ、「弁当展」が開催された1学期の段階では、子どもたちは日本とアメリカがかつて戦争をしたことすら学んでいない状態である。加えて、この「日系移民」については、一般的な文献も手薄で、ましてや子ども向けの資料は、簡単に手に入らない。子どもたちが「調べていくうちに、何を調べていたのかわからなくなった」と混乱状態に陥ることも、容易に想像がつく。子どもたちにとって負担のかかる内容やすすめ方は、その体験全体をマイナスにしてしまうおそれがある。年齢によってテーマが子どもたちの段階にあっていないことは、事前に掴めていても、いざ、見学、調べ学習となると、展示の歴史的背景を無視することは困難なことだったかもしれない。しかし、例えば小学校ならば、そのプログラムの目標を「博物館に親しむこと」という点に絞り、戦争や人権問題など大きなテーマについては、あえて焦点を当てないなど（これは極端な例かもしれぬが）、なんらかの対処方法が講じられたのではないか。いずれにせよ、学習プログラムを実施するにあたって、その学校の子どもたちの実態に即し、内容や学習の流れについて、もっと時間をかけて検討を重ねる必要があった。このことは、今後、学習プログラムを推進していく上で、十分考慮していかなければならないだろう。

話が前後するが、難しかったことが全てマイナスに作用したわけでもないようだ。子どもによっては、難しいことを克服していく過程で達成感を得られたという声があがっていることも一言つけ加えておきたい。

b. オープンエンドの学びの支援

確かに難解なテーマではあった。しかし、違う視点から見れば、このテーマに出会えたこと自体が価値のあることだったという評価もあがっている。学校側のさまざまな声を要約すれば、次のようなことであろう。

「日系移民」の問題は、今まで、教師自身ですら、接したことのないできごとであったし、ましてや、学校の教科書などでとりあげられたことも知る限りではなかった。「多文化共生」は、今日的な教育課題であるが、関西という土地柄もあって在日韓国朝鮮人の問題について焦点を当てるのが圧倒的だった。だから、同じ「多文化共生」を別の角度からとり上げることそのものが新鮮な経験であった。ものごとを多面的にみる姿勢を子どもたちに身につけさせることは大変重要なことだ。そういう意味でも、確かに難解なテーマではあったけれども、貴重なチャンスだったと思う。

この展示の全てを、今ここで理解することは求めていない。むしろ、ここで得られたことの記憶が、将来何かの折りに呼び覚まされ、あれは、そういうことだったのだと、その子なりに結実できれば、それで十分である。

最後に記した指摘は、今後、博物館での学びのあり方を探っていく上で、非常に大切な考え方ではないだろうか。従来の学校教育、特に教科教育は、子どもたちの年齢層に応じて明確なカリキュラムと学習目標が設定されてきた。ゆとりある教育をめざして、

多少見なおされるようになったとはいえ、その目標に対する子どもたちの達成度が相変わらず問われているし、子どもたち自身も、そのことを意識している。そうした教育の基本理念が、今後どのように方向づけられていくかはわからない、また、ここでとりあげることでもない。しかし、少なくとも、博物館での学びは、目標という一定のレベルがあり、プログラムの当の場で、ある程度の達成を期待される完結型の教育ではないはずだ。博物館での学びは、人は一生を通して学習するものであるという大前提にたつて、学びにつながるいくつかの可能性の芽を大切に育てることにある。われわれは、博物館体験がその子どもたちにとっての一過性のものにすぎないことを認識しつつ、子どもたちの可能性を信じ、彼ら個々の体験がその将来にわたり豊かなものになるよう、オーブリエンドの支援をしていくべきであろう。

4) 博学連携と今後の課題について

今までは、全体的な視点から、この「弁当展」の学習プログラムとその成果を概観したが、最後に、展示および学習プログラムに対する細かな指摘や、連携プレーを進める上での諸手続き、また、今後民博が学校と関係性を築いていく上での学校からの要望について、報告しておきたい。

出された意見を、以下、項目ごとに列記しよう。

(1) 「弁当展」の展示内容および学習プログラムについて

- ・ 展示の解説パネルの文や事後学習で使った参考資料の文章が難しく、子どもたちの理解の妨げになっていた
- ・ 展示内のビデオの内容が難しかった、子供向けのものも欲しい
- ・ 当時の食事のサンプルなどを用意して欲しい
- ・ 事後学習のときに、二度、三度訪問できるとよかった
- ・ 今回のテーマは、参考資料などを調べることが難しいので、博物館の人に質問できる体制が整っていることが望ましい
- ・ 「弁当展」に関連した参考資料のリストが欲しい
- ・ 関連資料が展示場にそろっていると、内容を確認してから購入の判断ができる

(2) プログラムの案内や、連絡の進め方について

- ・ 今回のプログラムは、連絡がおそかった
- ・ 年間の授業計画をたてるのが4月なので、企画展であれば、その時期に1年間の予定が欲しい、そのときに合わせて、教師用の参考資料やキット、子ども用の参考資料やキット、参加できるワークショップの有無や内容を知らせてもらいたい
- ・ 各学校に一通ずつの案内ではなく、できれば教師個人もしくは学年主任くらいまで案内を送ってほしい

(3) 博学連携を推進する上での学校側の障害

- ・ 時間の確保が難しい

- ・ 学校側の人手の問題
- ・ 博物館までの距離の問題

(4) 今後の民博の学校利用

- ・ 学習プログラムは常設展示にあれば、いつでも取り組める。その際、博物館側でいくつかのパターンを用意してもらい、必要に応じて教師がアレンジして活用するという方法が利用しやすい
- ・ テーマが変われば、切りこみ方も変わるから、その度に検討をする必要がある
- ・ 事前・事後の学習や見学当日に対応してくれる専任の担当者が博物館にいれば、相談などがしやすく、もっと積極的に活用できる
- ・ 博物館の担当者やボランティアの方が学校まで来てもらえる体制が整うと、学習の動機づけ、調べ学習、発表などをより積極的に進めることができる
- ・ 調べ学習、まとめ、発表ができるような場を博物館内に用意して欲しい
- ・ 教師は情報収集にインターネットを利用することが多いので、博物館側からの発信が充実することが望ましい
- ・ 見学会や企画展の説明会などの充実を図ってほしい
- ・ 事前に、説明会をしてもらったのはよかったが、その際、他の学校と意見交換できればなおよかった
- ・ 高校生には、大学レベルに近づいた専門的アプローチを、中学生には、進路学習、職業としての博物館職員、公共機関学習を期待する

(1) については、この「弁当展」が他の地域に巡回を重ねていく上で、できることから改善されていくことが望まれる。各地を巡り、その土地の人々と出会うことで、今後とも成長を続ける展示になっていくことを期待したい。2) については、前に触れたので、ここで重複して言及する必要はないだろう。3) については、今の学校教育というシステム全体に関わることであり、早急な改善は難しいだろうが、その現実の中で、博物館側も協力して、ひとつひとつ対処していく姿勢が大切である。さて、4) についてであるが、この「弁当展」は、全米日系人博物館の博物館教育を共有することで、そのノウハウを学び、博物館教育活動を推進していく糧にすることが重要な課題であった。その理念に基づき、今後、民博が民博としての実績を積んでいく上で、ここで出されたさまざまな意見は大変貴重な声である。

「先に博物館側から数種のプログラム案を提示することから始めるほうが、やりやすい」という現実的な声から、学校の現状をよく理解する必要性を感じる。その上で、「テーマが違えば、切りこみ方も変わる」という意見からは、プログラムの内容によって、その都度、双方が話し合うという柔軟な姿勢も求められていることがわかる。「インターネットによる情報の提供」、「専門的なアプローチ」、「職業体験など学齢層にそった対応」など、さまざまな機能的インフラが望まれている。しかしながら、とりわけ、博物館側担当者やボランティア体制など、人のインフラを整えていくことが、最優先で求められているのではないだろうか。

再三述べたように、今回の「弁当展」学習プログラムは、われわれ博物館にとって

も、また、学校にとっても初めての試みであった。上に記したような、先に送るべきさまざまな課題が浮上したが、それらに気がつくことができたのも、いくつかの実践をすすめたからにはほかならない。かつては、博物館も学校も閉じられた空間であった。しかし、この社会変動の中で、そのボーダーが緩やかになりつつあるのも事実である。民博も、この「弁当展」をひとつの契機として、迎える、出かけていく、という実践的な交流を作り、活性化させ、多少なりとも壁を低くすることができた。交流の中で、相手を知れば知るほど、継続してさまざまな課題に出くわすことだろう。しかし、始めなければ、相手を知ることもできない。今、われわれは、その大切な第一のステップに立っているのではないだろうか。これからの道のりにはさまざまな課題が待ち受けているだろうが、いま、ここに、立っていることを、今回の「弁当展」の学習プログラムの担当者のひとりとして、また、その報告者として、改めて強調しておきたい。われわれは、この機を逃すことなく、固められつつある礎をより強固なものにし、今後の民博としての博物館活動を展開していくことが求められている。

(吉荒佳枝)

<資料 1 >

和歌山／三尾村移民の歴史

1885年（明治18年）第1回官約移民「シティ・オブ・トウキョウ号」（2月8日ホノルル入港）山口県420人、広島県222人、神奈川県214人、岡山県37人、和歌山県22人、三重県13人、静岡県11人、滋賀県5人、宮城県1人、合計945人

1887年（明治20年）三尾村出身工野儀兵衛カナダに渡る。

フレージャー河の鮭の大漁をスティヴストンより故郷に連絡。

1888年（明治21年）10人足らずの日系人がカナダ・スティヴストン在留。

その後三尾村から多くの移民がカナダ・スティヴストンに渡る

1894年（明治27年）漁期にはスティヴストンに約4000人の日本人漁業者が集まる。

1897年（明治30年）三尾村出身者がスティヴストンに「三尾村人会」を結成

1900年（明治33年）三尾村人会、カナダプリティッシュコロンビア州政府に公認される。

1908年（明治41年）アメリカ合衆国ロサンゼルスに和歌山県人会が組織される。

1908年～1941年 和歌山出身のブラジル移民数は4369人

1920年（大正9年）カナダ在住和歌山出身者 男性1744人 女性853人

1929年（昭和年）和歌山出身の漁師、営利会社「リバー・フィッシュ組合」を設置。

1941年（昭和16年）12月、日本軍がハワイ真珠湾を攻撃し、太平洋戦争始まる。

1942年（昭和17年）アメリカ在住約11万人の日系人が敵性外国人として強制収容所へ。
カナダ在住約2万1000人の日系人が敵性外国人として強制収容所へ。

1946年（昭和21年）カナダ三尾村人会解散。村人会のお金で三尾に公民館「カナダ館」を建てる。

1951年（昭和26年）三尾村の青年13人、会社契約移民としてカナダ渡航。

1988年（昭和63年）アメリカのレーガン大統領が戦時中に日系人を敵性外国人として強制収容したことを公式謝罪し、個人補償を表明。

カナダのマルルーニ首相が戦時中に日系人を敵性外国人として強制収容したことを公式謝罪し、個人補償を表明。

三尾の人々が移民にふみきった理由

「きびしい自然環境による貧しさが最大の要因。三方を山に囲まれ潮風がふき寄せる立地は耕作に適さず、明治のなかばには漁業権の争いにも破れ、生活は極めて困難な状況になった。そして海外移住の道を選んだ」現在カナダ在住日系人約3万人のうち、およそ5000人が三尾出身者およびその子孫である。

<資料2>

田口光之助の一生

- 1898年（大正31年） 和歌山県日高郡三尾村で生まれる。
- 1907年（明治40年） 父吉松はカナダに出稼ぎに行く。その後母への送金無し。
- 1908年（明治41年） 父を心配して兄もカナダに渡る。送金なし。
- 1912年（大正元年） 14才にてカナダに一人で渡る。一月後、カナダに上陸するが父も兄も迎えにはきていない。一人でスティヴストンに電車で行く。たまたま駅に来ていた父につれられ、漁業の仕事に従事する。日本に送金する余裕はない。
- 1914年（大正3年） 父、兄は日本に帰国。
- 1916年（大正5年） 18才にて帰化する。翌17年一時帰国。
- 1918年（大正7年） カナダへ行く船中で病気になり、スティヴストンでは火事にあい、財産をなくす。病気がちになり、1921年日本に帰国。
- 1922年（大正11年） 24才にてカナダ・ビクトリア生まれのシズエと三尾で結婚し、単身カナダへ渡る。土地を購入し、翌年シズエを呼ぶ。
- 1923年（大正12年） スティヴストン漁業者の団体の役員に選ばれ、日系漁業者の中心となって働く。
- 1925年（大正14年） 長女生まれる。その後、子ども7人が生まれる。
- 1929年（昭和4年） リバー・フィッシュ組合副会長となる。
- 1931年（昭和6年） 病気がちな長男を連れてシズエらが帰国するが、再び戻る。
- 1935年（昭和10年） 子どもの育児や教育を考え一家で帰国。光之助一人カナダに戻る。
- 1937年（昭和12年） 家族に会いに一時期帰国するが、すぐカナダへ戻る。
- 1939年（昭和14年） 第2次世界大戦ぼっ発。
- 1941年（昭和16年） 大漁にわくが、戦争のため、日本に送金できず。（43才）
日本軍によるハワイ真珠湾攻撃がおこり、日系人は禁漁、ボートが没収される。
- 1944年（昭和19年） カナダ政府は光之助の家を安価で売り渡す。田舎の日系人農家に身をよせる。
- 1946年（昭和21年） 戦後の引きあげ船で帰国。（48才）
- 1946年（昭和21年） カナダ三尾村人会は解散し、その資金で三尾に「カナダ館」とよばれる公民館をたてる。その後、三尾で「カナダ連絡協会」の会長となり、1950年代に三尾村から100人以上の二世とその家族をカナダに送った。また村会議員として村の再建につくした。
- 1957年（昭和32年） 一家でカナダに戻る。スティヴストン仏教会の新築に貢献する。（59才）その後、カナダで静かにくらす。

「ある日系人漁者の生涯」より抜粋

田口光之助（和歌山県日高郡三尾出身）

これを機に、彼もカナダ渡航を志す。「働いて母を安心させよう」というのである。母は止めなかった。村立ちの日、三尾小の六年生と高小一、二年生全員及び教師が、片山という地点まで彼を見送った。光之助は、後にのこしてゆく人々のこと、これからの心細い独り旅、カナダでの生活を思って不覚の涙を流した。時は一九二二年三月。光之助は一四歳四ヶ月であった。

同年四月三日、光之助はBC州州都ヴィクトリアに上陸する。父も兄も迎えにきていなかった。日系人の経営する旅館でしばらく休息し、同夜のフェリー（連絡船）で晩市に渡り、翌日二時の電車でステイヴストンに向かう。

たまたま、光之助の父がステイヴストンの駅に来ていた。彼は晩市北方一、〇〇〇余キロのスキーナ河河口の漁場に行くべく、荷物を送りきっていたのである。兄はオーストラリアまで海底電線を敷設する船に乗りこみ、ハワイ方面に航行中で留守だった。光之助は、休み暇もなく父に伴なわれて北方漁場に向った。

四月の北カナダには降雪が多かった。ボス（第二章参看）の発言で、光之助は鮭取りの手伝いをするようになる。実にこの一言で彼の半生の道筋が決ってしまったのである。機械化の進んでいなかった当時の漁撈は重労働だった。それに、相手が生き物だから、仕事が夜にかかっても止むをえない。まだ一四歳の光之助は非力で、とても夜までは体力が続かず、怒も得もなく呟りこけて大人に叱られた。

一夏必死で働いたが、鮭取りは余り金にならなかった。雨ばかり降るスキーナの夏はすぐ終わってしまい、八月末に父親と共に淋しくステイヴストンに引き揚げた。やがて兄もカナダに戻り、父子三人同じ屋根の下で暮らすようになった。住んだのはキャナリー・ハウス（第二章及び第五章参看）。彼等の外にも一〇名ばかり独身者がゴロゴロしていた。

彼は、一九一一年に日系メソジスト教会が始めた英語夜学校（第五章参看）に通った。当時は、青年牧師養費一の時代であったが、光之助は一九二二年の秋から教会の礼拝にも出席し、遂には牧師宅に泊りこんで話を聞く程の熱心さであった。菅は光之助に受洗を勧めたが「日本の家には、先祖代々を信仰する仏教があるから」と謝絶した。菅はそれ以上強要することなく、光之助の良き話し相手として終始した。光之助は、日本から中学講義録を取りよせて勉強をつづけた。

教会にゆくかわら、光之助は某塩鮭製造工場（第四章参看）の独身労働者の食事をつくるコックとして働く。例によつて一生懸命に働いたので皆に可愛いがられた。けれども、金の方は一向に溜らないのである。到頭母には一銭も送れなかった。この年（一九二二年）父の年取は僅か二〇〇ドル。「これ位いの金なら日本でたつて稼ぐことができる」と光之助は考えた。

それでも光之助は氣をとり直し、一九二三年から庄司弥吉のパートナー（助手）として働く。報酬として水揚げの三分の一を貰った（第二章参看）。彼は庄司と気が合い、先方も彼の人柄を信用して五年間も光之助と組み、一人前の漁者に仕込んでくれた。光之助は網の修理技術等もこの時期に身につけたのである。一九二六年、彼が一八歳の時に帰化（第二章参看）して「英国臣民」(British subject) になった。いよいよ自分で「ネットマン」（一人前の漁者）になる準備がととのつたのである。

「ある日系人漁者の生涯」新保満『カナダ移民排斥史—日本の漁業移民—』未來社1985年より抜粋

わたしはだれなのか

日本とアメリカの戦争は、ますますはげしくなっていた。

それにつれて、収容所のなかは、

「わたしは、日本人だ。」

と、いう組と、

「わたしは、アメリカ人だ。」

と、いう二つの組にわかれていった。

二つの組のあ

いだでは、あら

そいがたびたび

おこった。

そうしたある

夜のことだ。

収容所のなか

の教舎のぼくし

さんが、「日本

人だ」という組

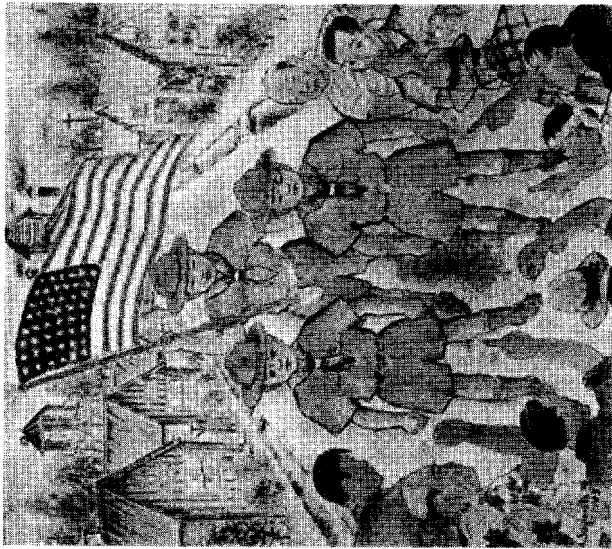
の人たちから、

おそわれた。

ぼくしさんは、

めちやくちやな

ぐられたよ。



わが國をもち



もう

なせかって？

収容所がな、おとなちぜんぶにな、むずかしいつもんをだしたんだ。

スミレが先生から出されたしもんより、もつとむずかしいしもんを……。

そのしもんをほくしさんが、英語のわからない人たちのために、日本語日本語になおしてよんであげたんだ。

<資料5>

教師向けアンケート 弁当展の「学習プログラム」全体について					
学校名	評価の理由・全体的な感想	取り組んでみようと思った理由	目的	達成度	今回の反省点
三島中学校	大変よかったです 中学校教師だけではうまく説明できない内容を事前学習や、実物を使った説明、プレートの再現などでわかりやすく説明していただき、学習の深まりがあった	多文化共生の取り組みを1年時からやっていたが、それを深めるのに通じていた	多文化共生	達成した	・学校側の事前学習が不元分だった ・1日で2つの博物館を見学するのは無理があった
北山田小学校	よかったです ・体験的に実物に触れることができた ・自分から何を調べたいか興味をもてない子が多いため、博物館の人やボランティアさんがフォローしてくれた ・教師も子どもたちも博物館にはどういふものがあり、どういふときに利用できるかがわかった ・博物館はものも大事だけれど、一番大事なのはそこで出会う人がいること	・総合学習における教師側の行き詰まり ・子どもたちは調べものをするときに本やインターネットにたよってしまい、人に積極的に聞くとうしない ・体験できそうだった ・近距離なので、つながりを作っていくことができた	食を通して、「人とのつながり」を考える	達成した	まじめな子どもたちなのできれいにまとめていたが、本当に調べたいことを自分の中でみつけられたかどうか
克明小学校	よかったです ・テーマが難解だったので、大変とまでは言いたいが ・博物館は見るだけの世界だと思っていたが、そうでない利用の仕方がわかった ・教師自身も触れることのないテーマだった、それを経験できたのはよかった。 ・将来的にこの経験を振り返ってくれば何より ・博物館はものがあるだけでなく、人がいて教えてもらえたりすることが子どもたちもわかった。静かにするところというイメージだったが、話をしたり、服を着たりという経験は初めて	・5年生から、在日朝鮮韓国の人々の問題に取り組んできたが、一方的な見方に陥りやすかった ・ハワイの日系人の立場のような違う視点から、問題を見ることで広い見方を学んで欲しかった	多文化共生	達成した	・せめて3ヶ月前に知らせてくれると一年の流れに組み入れやすい
同志社中学校	大変よかったです ・できるだけ実物に触れる形で、学園祭の発表までもっていきこうと思っていて、それが達成できたから ・展示内容というより、展示と子どもたちをつなぐ人がいるということが大きかった ・見学にいったら博物館の人が迎えてくれ、導入をして、自由見学の後、みんなの感想を聞いてくれたこと、だから、2回も見学に行こうということになった ・学園祭での発表も、その人が来てくれるということが、子どもたちのやり甲斐に通じている	・クラブ活動でやってきて、今までは、韓国などをテーマにしたが、違う地域に広げてみたかった ・授業よりクラブの方が小回りが利くと思った	多文化共生	達成した	
善後丘高等学校	よかったです クラス全体の取り組みは無理だったが、主体的に学習できた	民博を利用してみたかった	多文化理解	達成した	総時間数がなかなか確保できない
和歌山県下中等学校	大変よかったです ・体験型の弁当展を見学させてもらったうえで、専門の先生の話がきけた ・自分が住んでいる地域の近くに移民の村があったことや、身近に移民の経験がある人がいながら知らないことが多かったことに気づき、生徒たちは驚きと共に深く興味づけられた	・国際教育に通じた内容だったから、特に我々の研究会(和歌山県高等学校国際教育研究会)は「移住教育」を担うことを目的に設立されたと聞いていて、その主旨にもなっていた	多文化共生	達成した	・参加者の意識が高かっただけに、お互いの意見交換の時間が十分持てなかった ・博物館までの移動時間が確保できない

<資料6>

教師向けアンケート 弁当展のテーマと学習プログラムについて							
学校名	関心	難易度	理解度	左3項目に対する理由	事後学習内容など	見学時の子どもたちの様子	アクティビティ・キットの利用
三島中学校	もてた	もてた	理解できた	・中学生に適切な内容だった ・わかりやすい説明でそれなりに理解したと思う	・一生懸命作業をしながら、ワークシートをまとめたが、事後も楽しく学習できた ・大きなテーマに広めず、見学したことを振り返り興味をもったことに絞るよう指導	・楽しんでいた ・実物を見たり、劇をしてもらって楽しめたと思う	・楽しんでいた ・ファッションは人気があった ・言葉あそび、紙芝居は役にたった
北山田小学校	もてた	難しかった	理解できた	・戦争では日系人が辛い立場にあったことは掴んだよう	・子どもたち向けの資料が少なく困っているようだった ・調べ学習の時、子どもたちの興味や今の状況について把握する必要があるが、教師の手の問題などがあって難しかった	・楽しんでいた ・半分以上の子どもたちは何かもって帰ったのでは	・楽しんでいた特に言葉遊びなど
克明小学校	もてた	難しかった	まあまあ理解していた	・興味を持った部分はある程度わかったが、言葉が難しかったりで、整理しきれしていない ・ハワイに日本移民があったことは理解した	・子どもたち向けの資料がほとんどなくて、困っていた。 ・一生懸命やっても難しいことばにでくわし、何を調べているかさえわからなくなった	博物館見学は楽しんでいた	・スーパーのキットは楽しんでいた ・さとうきびファッションは、6年生ほどの年齢になるとはじめるのをためらったりしていた
同志社中学校	ある程度もっていた	適当だった	理解できた	・全部を理解したとは思わないが、自分が発表をするところは理解していた	・学園祭で発表する ・常設展示のハワイの生協の店と結びつけて、ハワイのローカルをテーマにした。 ・みんなが担当を決め、ハワイの観光パンフをつかうなどアイデアをだしながらやっている	・大変楽しんでいた ・博物館の場でまとめまでやれたのが効果的だった。途中で質問や確認することができし、最終的にまとめたものを博物館の人にみてもらった	・とても楽しんでいた ・ことば遊び、スーパーマーケット、ハナハナウェアなど、紙芝居は自分たちでやりあっていた。 ・宝さがしなどはやっていない
雲雀丘高等学校	関心がもてた	難しかった	理解できた	理解という概念が難しいが、取り組みにくい内容を体感し、知ることができた	なし	今回のように、教師でない人とふれあいながら学習できたから大変楽しんでいた	高校生でも楽しみながら疑似体験としてシミュレーションできた
和歌山県下中等高等学校	大変関心がもてた	適当だった	理解できた	・アメリカ村の存在さえ知らない生徒が多かったが、和歌山県に移民が多いという新しい発見があった	・現在のところなし ・参加者全員が再び集まることは無理でも学校単位くらいでは話ができると思う	・大変楽しんでいた ・日程的にハードだったのに関わらず、不平不満の声はなく「面白かった」「いい勉強ができた」と感想を聞いている	・大変楽しんでいた ・自由に手にとって体験できる手軽さが受けたよう